

(芳梅は伊藤博文)  
(中井は中井弘藏)

別封乍御手数中井氏へ相とゞき候様御家來へ

芳梅 盟 兄拜復

七七 伊藤博文宛書翰

明治二年六月十一日

過日は御妨申候今日は參上可致と存候處御外出之よしに付他へ廻り申候少々御相談いたし度事も有之御閑暇之折承知いたし度候横濱御出は彌何日候哉是又御聞せ可被下候先は爲其草々頓首

六月十一日

木戸

伊藤 様御内披

七八 伊藤博文宛書翰

明治二年六月十三日

亂筆御免

一昨來留連蒙御懇情近來之開鬱を覺へ奉萬謝候

(大隈は大隈重信)

(田中廉太郎は田中光儀)

一 相願置候大隈氏見込書一つ書にゐざつとにても大意相分り候丈け御認め被下候得ば別々難有奉存候  
一 箱館判事差向無之は不相成候處人物一向心當り無御座昨日御相談可仕と存失念仕候御近所被仰合相應之人有之候はゞ早々御示し被下度其中別人被仰付候へは致し方無之何卒此人柄は相撰らひ置度事と存申候吳々早急に御相談御示し奉願候  
一 舊年於浦賀付合候人物に於田中廉太郎と申もの御座候處經濟之才少々有之候歟に於與力位より勘定奉行組頭に出新潟へ出張仕居候由少々は名義も論し候へともとゞ幕臣ゆへ決る油斷相成不申候へ共頻に會計之事等も論じ申候別紙之廉も建言中には少しは可取事も有之候歟と相考申候盟兄へ御面會仕候る委曲十分に相論し候様申聞け置候間罷出候はゞ御逢可被下候自然可用處も有之候はゞ監察なりとも御付實行を御試有之候るは如何弟などは甚迂遠故一通承知仕るも相分り不申候

(世外は井上馨)  
(光田光田三郎にして光妙寺三郎)

一 鑛山之義に付別紙落手候間世外兄へ早々御とゞけ奉願候一昨日光田子へ相頼み置書類も世外兄之手に入候哉御尋可被遣候自然萬一も光田子相忘れ候は、乍御手数御詮義奉願候  
先は右申上度左右侍妃へも可然御致意可被下候勿々頓首

六月十三日

尙々有志者罷出候申上候は、家の一條早々相運候様御配意可被下候  
鳥尾子は彌いつより横濱へ罷越申候哉是又御示し可被遣候以上  
生野銀山之處必御厄害生し可申弟先日より御氣遣申候得とも何も難致  
世外兄へ得と御嘶置可被下候□□□□□□□□

芳梅 盟 兄御密披

鐵面生

(芳梅は伊藤博文)

七九 伊藤博文宛書翰

明治二年六月十三日

(東久は東久世通禮)

今朝一書差出候處御覽被下候と奉存候さて過刻東久卿御來訪昨日之様子

(大久保利通副島種臣)

を承り候得は知藩事を一般に被仰付方可然との義大久保副島同論に、  
申立有之候由預御相談候故弟は最前之義御至當に、  
朝廷を奉思候ものより世間之沸騰と歎何と歎世間論に御搖被成世間之已  
を思ひ候もの、御機嫌を御とり被遊候得は如何とも難致前途を御推考  
朝廷之興廢を被思召候は、準一之論可然歎と申上於準一始終同一と御返  
答仕置候得共如此風に、一日之不動に、も天下萬世に涉り候大議論容易  
に、搖動仕候様に、は更に見とめ無之而已ならず痛歎無限次第に御座候末  
一段に、今一入副島を破摧いたし候手段は無御座哉且又鳥尾にも十分之  
力を助け是非々々大久保黒田へもラツバを鳴し出陣有之度必世間之嫌疑  
に及ひ不申候一御盡力可被下候勿々頓首

十三日

鐵面生

(芳梅は伊藤博文)

芳梅 盟 兄内密御火投

八〇 大村益次郎宛書翰

明治二年六月十三日

拜啓爾後御無沙汰申上候彌

御清適奉大賀候

- 一 會津降伏人蝦夷地へ相移し候都合元より御官之御引受に相成居候事に付逐々御手を被爲下候御事と奉存候處薄々承り候得は會計官と何歟御懸け合之事も有之候哉に承知仕候如何之御都合哉奉窺度奉存候
- 一 佛式陸軍之處段々利害を相論じ頻に四方より預議論且前途之得失を舉げ喋々承知仕候得共弟逐一應するに力なく且又其説も全局之形勢より論し出し候處多く何卒拜青之上得と御高論相窺度奉存候
- 一 招魂場之處は兼而御氣付も有之候通九段上に彌一昨々日御決定相成順に御達し有之候御事と奉存候元より御高按有之候御事と奉存候得共後來まで面白き趣向に御工夫奉仰候
- 一 朝敵御所致之次第是まで少々不都合も有之候得共稍條理も相立居候

(覆本は覆本武揚)

處此度覆本始其儘に可差置之議論薩人始頻に建言有之決而御頓着に及ばぬ事に御坐候得共爲其兎角遷延仕候覆本等も可惜才藝は有之候得其實に於條理如何とも難仕付るは巨魁之もの丈け死罪司令已上於生藩禁錮其余は軍務におゐていか様とも御委任に付徒罪同様に御遣ひ有之候とも且々其處を得候得はよろしく御坐候事に付遮る言上仕置候得共昨日來不快に参 朝も不得仕ぐらゝ仕居不申哉と相考申候何卒御催促可被爲成候

一 天下四方之情態を想察仕候に中々諸侯今日之根情に参は

大政一新も一向

皇國之大益とは相成不申封縣は不宣と口では喋々相論じ其實は一人も藩弊之任を眞に相盡し候ものは無之一軍を出す度ごとに拜金をねだり御金下り不申候得は不平而已相ならし全現場は群縣同様に更に封縣之甲斐は無御坐只此一端を以推考仕候も

皇國前途之大患を相察し候もの無之付るは何分にも於

朝廷訖度威力と相成候ものを御養ひ置是を以天下へ及し  
皇國を如富山形に相なし不申は所詮維持無覺東と奉存候其中外ケ輪よ  
りは漸々其處へ着意仕候様之御誘導方も不知々々無之は不相成と奉存  
候

一 將來之成否は只會計之目的相立と不相立に有之申候元より會計は諸  
官に敵對不仕は不相成於諸官も  
皇國之大略を相悟り候ものは是非尻を推し相助け不申はもちこたへ六  
つケ敷是を見る實に虚心平氣に無之は其當を難得不知々々己の田へ水  
を引之論におち入大成就六つケ敷と奉存候是又得と御相談仕置度奉存候  
いつれ近日拜青相願度奉存候得共其中御合置被成下度乍勿卒奉亂筆候勿  
々願首拜

六月十三日

尙々小倉なども先生之御説を承り違ひ徳川を目的に學問仕候様に御示

（小倉は小倉右衛門介カ）

諭有之候様相心得別人に相とき不知ものは爲其に不審を起し色々氣遣  
ひ申出候もの有之候に付全く承りそこなひ候邊は弟より具に人ごとへ  
尋候ものへは申聞け置候間自然小倉始拜顔仕候ときは御示奉被成置可  
被遣候拜

大 邨 先生御密披御投火

鏡面生

（大邨は大村益次郎カ）

八一 伊藤博文宛書翰

明治二年六月十五日

大亂筆御推讀可被下候

昨日は態々御光來被下候處勿卒に甚殺風景至極遺憾奉存候于時夜半岩  
卿御來訪今朝大久氏來訪少々罵詈不平不得止吐露加るに大に前途之着目  
を論述仕候處元より誠心微々十分之こたへは無之候得ども稍相變じ候事  
も有之會計などもどふ敷一分利に可出敷と相察申候乍去是まで之都合を  
相考見候得ば欲立しては挫け欲立しては挫け元より引當に不相成事は今

（大久保利通カ）

更不能申候得共此行が、り先入るに無山行に無地應機一手段は無之  
は不相濟歟と奉存候只拱手傍觀とまで落着も容易にいたしるもよろしか  
らず先は當分は御閑居に御熟考乍迂見時機御通し申候は、必今一應御  
奮起可被下候決り十分之着目有之候と申譯に御座候得共今一療治  
は加へ置度ものと愚考仕候事も御座候間必是は老生之説に御扨從可被下  
候世外兄へも此段は御晰置可被下候先つ府外へ當分御出之事は御見合可  
被下候乍去閑居に御むやみに松濱をなし候はよろしからず是は戯言にあ  
らず必々御用捨可被下候先は爲其勿々頓首

(世外は井上馨)

六月十五日

芳梅 盟 兄御密披

鐵 面

(芳梅は伊藤博文)

八二 上山清也宛書翰

明治二年六月十五日

亂筆高怨兎角取紛候に付頃來度々書狀不奉呈候何卒御了簡奉願候山田

(山田は山田欣一なるべし)

へ留守へも乍失禮此段可然御傳言奉願候拜

(山尾は山尾庸三)

極暑之節先以御清榮奉賀候さては先月廿八日御賢息様始無滯東着仕候御  
放慮是願候御賢息様別御堅固不日山尾へ相頼御修業方丸に託し可申と  
相考へ申候如御承知月を逐ひ日を逐ひ變遷いたし候事に御中々弟等前途  
之目的も難相立候へども只管高上之事を望候とも千萬人中に屈指之地位  
は中々容易に無之付御は一事一行に御も着實に了得仕候方後來之爲歟と  
も愚考仕候又國家にも必其丈け之御奉公は出來申候乍去眞之人才に至り  
候御は世界各國只學文上而已に御も無之當今米之大統領は一小士官より  
起り佛之ナハレヲンも前後兩人とも匹夫より出其他賢臣良將も其たくひ  
不少多くは在人御只學文上而已に御不可期と奉存候い細は木梨信一も歸  
藩に相成候に付尙得と御承知可被遣候左候御高按も御座候は、御示奉  
願候先は爲其奉呈候何卒御滿堂様へも可然御致意奉願候其中時下御自玉  
第一に奉存候草々頓首

木戸孝元文書卷九 (明治二年六月)

三百七十九

六月十五日

尙々山田留守にも如御承知皆婦人之事に付巨細之事情も難陳盡候間何卒御序も御座候は、安心之に至り候様御示諭奉願候只々愚考には一事一行着實に仕候方却あ國家へ之御奉公歟と奉存候求名望利候は公私之爲にあらず危事と相考へ申候間何も不願申上候以上

清也 老臺御直披

孝 允

(清也は上山清也)

八三 河北一宛書翰

明治二年六月十八日

亂筆高恕

朶雲拜見仕候弟も昨夜來不快に付今朝も參内不得仕候間い細之御様子御承知不仕候へ共決る格別之事には有御座間敷從來御用有之候節御下問之儀も可有之と歟又は三日五日或は一日置

御參

朝と歟申御事どもには無之哉と奉存候何歟廉ある御沙汰に御座候へは一體之處には弟も預御評議候譯に御座候間承知仕候事と奉存候過日御着前御東着之上は鹿鹿兒島知事公右邊同之御沙汰も可有之歟之御様子鳥渡承知仕候西郷板垣などへも御沙汰之趣も有之候歟之よし承り申候先は爲其勿々頓首拜復

(鹿兒島知事は島津忠義)  
(西郷隆盛板垣退助)

六月十八日

尙々西郷は老功之事板垣は一旦參與も相勤候邊にはの事にも可有之歟と窺申候しかといたし候事は是又得と承知不仕候知事様には兎に角明日は御參朝被遊候方可然と奉存上候拜

河北 様内拜復

木 戸

(河北は河北一宛)

八四 小幡高政宛書翰

明治二年六月廿五日

亂筆高恕

先以御清福に被爲居奉大賀候過日は態々朶雲御投與難有奉拜誦候弟も所詮不快に罷在處此頃東着仕候都合相變り候事も無御座乍去一體之事は日々變移仕候氣味にて意外に存候事も不少必竟は宇内之大勢一變上より相起り候事かとも被察候其故却る三百候會集相成候事とも中々都下之勢は舊時之様は少しも無御座小藩は獨歩同様之處不少大藩にても五六人位に而之歩行も有之候近來海外之事を傳承仕候るは實に前途之處不容易事と奉存候近頃御國光景如何に御座候哉一向承知不仕老臺之御盡誠は折々相窺候得共東京に相成候と自然御國之事も京都と違耳遠御座候于時當地へ之御遺物善心坊之盡力に而此節玉川在より一應呼出申候い細は杉氏より申上候都合に御坐候實に梅曆曉鳥等の小冊を播き候心地仕候於御當人は一段之別意味可有之と只々相像仕候向後相應之事も御坐候は、無御用捨

被仰聞可被下候傳承仕候へは此節於御地珍品御入手之由夜々或は日々御愛玩と奉遠察候先は任幸便取急一書呈上候其中時下御自愛第一に奉存候草々頓首拜

六月廿五日

尙々過日は高吟御示し奉萬謝候奉汚玉韻度と再應愚考仕見候得共一年間漸一二作之詩人故兎角不任心御笑察可被成候

餅山老 臺御直披

允

(餅山は小幡高政)

八五 伊藤博文宛書翰

明治二年六月廿七日

病臥中相認尤亂筆御推覽可被下候近日軍太を歸し候故井上兄へ御頼之事遣し候以上

(井上は井上馨)

朶雲拜見仕候彌御清安奉大賀井上兄も朔日乘艦之由速に成功之處只々奉祈念候必々小立腹は無之様いたし度人々己之意に不満事有之候得は兎角

(大村は大村益次郎)

(五代は五代友厚)

無懸引罵詈いたし候ときは其を幸に因循家ども己に尤をつけ非を遂げ候  
 氣味不少既に郵中ども、遂々かき立置候術も一朝に泡と相成候氣味有之  
 遺憾至極に御座候擧る名々尤を己に立候ときは 朝廷何を以相立可申歟  
 今日不盡も盡も同様と歎息仕候○南部庄内之事は熟考いたし不得止之時  
 勢且前途版籍論も實行相立不申るは不相濟事に付御面話いたし候當日大  
 村へも參與連へも大略相論じ内々目的は相立居申候いづれ御歸府之上一  
 應御相談可仕候廿五日にも御出歟と存爲其に御待申居候○五代之一條被  
 免候方可然様存申候事跡を見候に 過日之御断に當季□□に御座候は、早々替りの人御撰ら  
 ひに當人被免候方可然歟と存候御高案如何 朝廷之御爲如何歟と存申候且又薩よ  
 りも事を舉段々申出候事も有之候歟之由此度之事は一向存不申候得共會  
 計官にも彼が引ば誰も皆引など兎角申出有之候も實に不面白實に於風儀  
 も往々爲よろしからすと愚考仕候弟も廿五日之夜より突然暴瀉及吐四五  
 日前より一入氣色も不宜候處果し如此仕合其故一向外出も不得仕近情  
 は更に承知不仕候先は爲其御答申上候勿々頓首拜復

六月廿七日

尙々いつ頃御歸府候哉御序に御聞せ可被下候弟も屢病苦に惱まされ甚  
 困却いたし候只々閑地を得今少々療養を相加へ見度と存居申候以上  
 井上兄彌浪華滯留に相成候は、たんと開候手を被出ぬ様必御一聲可被  
 成下候

芳梅 盟 兄内々密々拜復

鐵面生

(芳梅は伊藤博文)

八六 田中不二麿宛書翰

明治二年六月廿七日

拜啓先以

御清榮奉大賀候爾後相窺可申と奉存兎角取紛失敬申上候さては此品千萬  
 輕微之至奉備雷覽候も却る奉恥入候得共持下り申候に付差出申候間御叱  
 留を玉わり候へは幸甚之至に奉存候先は爲其勿々頓首九拜

六月廿七日

木戸孝九文書卷九 (明治二年六月)

三百八十五



(水野羽後守は水野忠敬なり)

尙々千萬申上兼候得共過日水野羽後守より建言有之候一書何卒筆生に御寫させ被成遣候儀相叶候は、偏に奉願上候拜

(田中は田中不二鷹)

田中 先生拜呈

木戸

八七 榎村正直宛書翰

明治二年六月

千萬御面倒之儀御多事之央申出候は何とも恐入申候得共弟も不本意候<sup>な</sup>得ども當分歸省仕候様にも参り兼殊に引つゞき不快に甚困却致し候間<sup>がら</sup>兔に角一家東京へ<sup>暫に</sup>滞留呼寄せ申度此度其段申越候間千々萬乍御厄害御氣を就け被下御存分に御駆け引奉願候女と兒と愚僕而已故如何と聊懸念致し何分にもよろしく奉願候京地も當時逐々淋敷相成候故家内を引寄せ候は纔にもも人氣へかゝわり申候間近處へは當分<sup>位</sup>吳之唱へ可然歎と存申候いか様とも丸々御願申候頓首  
將來之形勢を推考仕候へは京地は實に游民多く只々天下之人之彼地へ滯

留いたし財を散し候を引當てと仕候様之次第に眞に

皇國強剛と相成候時は京地は自ら不相立譯に何之所存も無之只一時之輻輳を望み候心底に常之産有之候ものは至少く西京之ものは自然と職人も多く候得ども東山近邊總而東京には大抵游民而已に付後來之爲どふと歎御好手段有之度ものと乍陰奉存候元より御疎も無之御神算有之候事とは奉存候得共乍序でたらめに申上候事

御直拆

(此書は月日及び宛名署名を闕くも明治二年六月木戸孝尤が榎村正直に贈れるものなり)

八八 廣澤兵助宛書翰

明治二年七月五日

亂筆御推覽可被成下候虛心之處に弟は本文之次第歎と愚考仕候拜一昨日は參上蒙御馳走奉多謝候尙昨日は朶雲御投與奉拜誦候さて昨日參朝仕候處一昨日粗御嘶申上候前原一條之儀條岩二卿より腹臈人物實情申

(前原は前原一誠なり)

上候様内密御下問も有之候に付何とも御返答に相窮し候乍然  
 朝廷上一大事件に付私情而已を以て用捨仕候も上下公私之義におゐて不  
 相濟と奉存元より同人をかたき様之處有之候長所は長所に言上仕また  
 偏に極る愛憎之有之候處はなきにしもあらず且少々疑惑之性質も有之  
 候様相考一々は不被申上候へども大略虚心を以御下問に答へ置候元來  
 老兄と弟とへ之御下問之由に付老兄は如何被存候歟存不申候へども格別  
 相違は有御坐間敷尙 老兄へは 老兄へ御下問被爲在度と無余儀困り候  
 仕合故申上置候乍去一應老兄へも御晰仕候様にとの御内諭に付昨日參上  
 仕候處未御退出無御坐に付引取申候依る此段一應申上置候爲其勿々頓首  
 拜

七月五日

允

(障岳は廣澤兵助)

障岳老兄御密拆

八九 伊藤博文宛書翰

明治二年七月七日

極密御一見之上直に御火中

一昨は折角御光來被成候處無據仕合に極々御談も不得仕失敬且遺憾之  
 至に御座候さては爾後之光景も彌不面白弟は元より近頃病氣勝にも有之  
 荒職之次第奉恐入候間是非休暇を奉願候義に御座候處後來之處實に御大  
 事と奉存心底を盡し大隈を是非々々參與に建言其他今日着手之次第數件  
 異議申立候得ども一向御採用御六つヶ敷一時之御申譯に津田大中辨位に  
 御登用之事而已ども御採用に相成候歟是又嫌らひ之人多く未決定は承知  
 不仕候類に前之字などに參與をすりかへ候論内密大に有之候由に元々  
 飽果られ候は幸に毫厘も遺憾は無御座候得共從來御承知之通偏派之人  
 天下之樞路に有之候は將來之處益無覺東候間上下公私之差別を立御下  
 問に答へ申候處御下問も内實きまり候上之御下問に更に建言之益も無  
 之口をたゞき候丈け之事に木石に對し候方却る一入雅味を覺申候前之

(大隈は大隈重信)

(津田は津田田出)

(前は前原一誠廣は廣澤兵助)

字なども廣氏之説に承り候得は例之一流義に於越るも堀割之事を獨斷し百萬金之入費に相かゝはり候處余程失策之由に於此決末如何と甚痛心いたし居府縣に於如此事を長人より仕出し候に付は彌此始末を立不申は諸方之知縣事等何を以可被制哉など長人之長人に係る私情を以も申居候様之事に御座候處何分御氣に入多く存外至極之仕合最中手も足も立不申候過日御晰之つゞき有之内實近情申上置候直に御投火可被下候版籍論は元よりいつとなく色を益變じ申候浩歎と申も古めかしく候得ども實に浩歎々々にちかひ無御座候○吉松平四罷越候は、兎に角是は是を緩々御晰可被下候心事感服之至に御座候先は爲其勿々頓首

〔吉松平四郎〕

七夕

允

芳 盟 兄極密御獨披

〔芳は芳梅にて伊藤博文〕

九〇 大久保利通宛書翰草按

明治二年七月九日

拜啓先以

御清榮奉大賀候さては長々汚要路候處此度閑散之命を蒙り誠に以難有奉存上候且御政體も判然相立爲  
 皇家恐賀此事に御座候然處抑參與之地に參仕仕候は御政體にも相度り大に世間之耳目に相係り必爲  
 皇家不可然儀と奉存候且又待詔院學士と申  
 御沙汰を奉蒙候處文宣之私いかに鏡面皮に於も對天下學士之名目を以安し居候事不相叶漢土は如何歟存不申候得共有名無實は可成丈けは  
 本朝に於は相省き度ものに候一應今日御參仕之邊思食も窺度奉捧呈候先は爲其勿々頓首九拜

七月九日

允

〔甲東は大久保利通〕

甲東 先生

〔此書は木戸孝允が大久保利通に贈らんとせる草案なるべし、大久保侯爵家所藏の書は末文相省き度云々以下次の如きを以て記して参考となす〕

相省き度ものに奉存候付るは何卒此度之恩命を幸に歸耕仕度いづれ心中歎願も可申出と奉存候得共差向今日之處困却仕候第一日より暖昧之事に天下之耳目を動し候るは誠に不相濟事と奉存甚痛心仕候是非とも御断申上候心得に御座候得共一應今日御参仕之邊思食も窮度奉捧呈候先は爲其勿々頓首九拜

七月九日朝

孝 允

甲 東 先 生 御 内 拆

九一 大久保利通宛書翰

明治二年七月九日

華帖奉謹讀候折角小弟へも御沙汰御座候處抑之事に付滿朝之耳目を迷わし候様に而は終に御政體も水泡に屬し候様相成甚難安奉存候心事一應條公へも言上仕候仕合に御坐候態と御人遣萬謝奉存候不取敢草々頓首奉復

七月九

允 拜復

甲 東 盟 臺

（甲東は大久保利通）

九二 大村益次郎宛書翰

明治二年七月十日

（前文缺）韓地之一條も今日より稍定算相立居不申るは世上種々之辯論横來終に今日之形勢に而不得止之處より他に着手仕候様相成候るは根軸成不成之機を失し候而已ならず一時之大好機を誤り

皇國之方向を相定め  
朝廷中を制し候權彌下に移り不可束次第は如見に愚考仕候就るは是非とも前件相定候上に而は此儀も御一決に相成候處御相談仕置度奉存候乍病骨一度渡海仕見度何分にも着手より先兩三年之見込は相立置不申るは差問申候乍去必密策は他人へ御示しは御無用に奉願候吳々も厚く御熟慮被成下候様平に丸に奉祈念候今日天下之事只々上下之權より瓦解仕候誓る上に其權を握し平均之勢を作成し妨るものは忽ち一刀兩断と申處はどこまでも不可失事と奉存候必竟何も其種をこしらへ度苦心痛慮御降察千禱

萬祈に不堪奉存候草々頓首九拜

七月十日夜十一字

(此書宛名署名を聞くも木戸孝九が大村益次郎に贈れるものなり)

九三 伊藤博文宛書翰

明治二年七月十二日

亂筆高恕御覽後必御火中被下候

昨日は折角御光來被下候處殺風景之至に御座候さてはちらと御噂有之候  
金札論は是非屹度條理を立其非を責め御發途は爲其に御引とゞめ極に  
御沙汰有之會計主宰之もの早々東下いたし候様に位之御達有之東下之上  
は訖度立會に論決不都合は御叱りも有之候位に無之は往來之御爲却  
不<sub>レ</sub>宜と痛歎仕候且又御請に相成候御主人御本人には現に此地に被爲居  
候に家來之<sub>一</sub>了簡を以かゝる天下一般に相かゝり  
朝廷浮沈之事件を大坂會計官へ直に申出御主人御本人は丸々不被爲知と

(大隈重信)

申も余り之不都合驕豪には無之哉實に諸藩一統へも相係り誠に以不容易  
義に付迅速御評決其御運に御盡し有之度奉存候御疎は不被爲在と奉存候  
ともあれこれ苦痛之余申上置候尙昨日御話も得盡不申近日是非拜青いた  
し度奉存候大隈氏へも可然御致意是願候爲其草々頓首  
十二日曉

鐵 面

(芳梅は伊藤博文)

芳梅 盟 兄内密々々

九四 杉孫七郎宛書翰

明治二年七月二十一日

亂筆高恕弟も爾後益不快に甚困却仕醫師之促しに隨ひ湯治と決着いたし候誠に以弱り果殘念至極に御座候以  
過日之暴風御左右有之候までは夜白如何と御按申上候處清水港より之御  
報承知致し船中之御苦難實に御察申上候得共無恙御揚陸之段雀躍此事に  
御座候

君上には御順も宜敷様奉窺候に付頓に 御歸國被爲游候御事と奉存候付  
亦は御前後と相成逐々御着手之邊も如何と御苦慮之處奉遙察候何卒天地

木戸孝九文書卷九 (明治二年七月)

三百九十五

自然之道理に基き人意にあらざる處之旨趣貫徹仕候様御配慮被爲在候方  
却る人々も易悟歟と愚考仕候佛前之說法申上候も赧顔至極に奉存候先は  
御見舞旁奉捧呈候御序之節諸彦へも可然御致意奉願候爲其草々頓首九拜

七月廿一日

尙々別番千萬乍失敬御面會之節山田へ直に御渡し奉願候中に他へ遣し  
候書状も一二通有之申候以上

猿村 老兄御内拆

允拜

（猿村は杉  
孫七郎な  
り）

九五 伊藤博文宛書翰

明治二年七月二十一日

彌御壯榮大賀此事に御座候さて過日は色々御世話に相成毎々難有奉謝候  
于時只今承り候へは今日にも横濱行被成候歟之由一應拜話いたし度と奉  
存候處残念至極に御座候彌いつ頃御歸に御座候哉鳥渡御尋申候弟も暫近  
郷へ罷越度右に付少々御頼談も仕度委細は跡より可申上候間宜敷奉願候

先は爲其草々頓首

七月廿一日

尙々大隈氏へも可然御致意奉願候拜

伊藤 様御内披

木戸

（大隈重信）  
（伊藤博文）

九六 伊藤博文宛書翰

明治二年七月二十二日

（田中は田  
中不二麿）

御手紙致拜見候田中之件先達を御沙汰相成途中に滞り居候事と被察申  
候早速詮義爲致可申候べタル之事早川渡へ御傳言承知いたし候早々御國  
へ申越候に付不日御地まで連れ届可申候間御受取可被下候先は爲其取急  
勿々頓首拜復

七月廿二日

尙々先達を御嘶仕置候蒸氣船入用之もの於馬關取調候分越荷より御局  
へ可申出候に付御拂方可被下候御頼仕候以上

木戸孝九文書卷九（明治二年七月）

三百九十七

(芳梅は伊藤博文)

芳梅 老兄拜復

干 令

九七 伊藤博文宛書翰

明治二年七月二十三日

(小原鐵心は小原是水)

爾後御清適大賀此事に御座候さては今日小原鐵心翁其他潜行明日より直に歸國此翁は實に當世之亦人物に而後來可頼事有之申候曾而此翁之句に明月蘆花秋一般と申七字有之同志と思ひ申候何何此晚大隈兄も御手隙に御座候は、御同行御一宵を御消し可被成候爲其亂筆を捧申候草々頓首

(大隈重信)

七月廿三日

尙々忽々御他行に付弟は失望不少候呵々

伊藤 俊介様御直念

木戸 準一郎

(伊藤俊介は伊藤博文)

九八 伊藤博文宛書翰

明治二年七月二十四日

亂筆御推覽御投火々々

彌御壯榮大賀此事に御座候さては東京も大平天下も大平に至り可申此機會に將來之禍を防ぎ大勢之傾き候を相矯度と百方苦心いたし候へども萬分一之効顯も無之獨浩歎罷在申候また々々拍子に芝居相始り可申候逐々兵力と歎に而御出張も有之候由嚙々御強き事と臍之下に而一笑仕候何分弟も決然相去り度近邊之温泉願位いたし居候得共御許容相分り不申定而今日にも出候歎と相考申候内主意は何分爰にも飽果申候付而は少々御目にかゝり相願置度事も有之申候何頃御歸りに相成候哉至急に乍御手数御示し可被下候吳々奉願候草々九拜

七月廿四日朝

大隈氏へ可然御致意可被下候以上

廣老人も少しなりとも目的を論し候而出かけ候へは宜敷候處忽西論に隨從甚苦心之至に御座候 御火中々々

(大隈重信)

(廣老人は廣深兵助)

(芳梅は伊藤博文)

芳梅 盟兄御密拆

允

九九 廣澤兵助宛書翰

明治二年七月二十六日

過日は態々御光來奉萬謝候今朝參上仕候處只今御參仕と申事に甚殘念に奉存候少々御相談も仕度事有之前途を推考仕候處逐々御内話申候通昨日之是は今日忽非に相移り候光景有之偏なる勢を以此天下を平均仕外國に及し候事など申事は尤艱難之至に其萌芽之今日きさす處は識者之憂を不待殊に此際素餐も恐入候譯に再勢之動き候ときを相待候様に響き候も不面白且自と種々之議論奏湊仕候にも困却仕候而已ならず御國之有志家と申ものまでも兎角と又見を異にし候氣鋒有之弟曾々癸丑頃吉田先師と東武に奔走一人是を是とするものなし而して今日先師之誠意徹底いたし候事不待言實に一生之一言と雖も死を以對天地杞憂を醸し候事は可恐ものにも此際種々之異見相立候事は甚以爲前途に苦憂をかさね申候付るは弟も不如歸之策第一等歎といかにも思付申候三五日には是非相發

（吉田先師  
陰は吉田松

し度と奉存候尙預御高論申度と奉存候御一按被成置可被下候

（□は一字  
不明）

一別紙は先日田村民輔持參に相願候測量之事段々弟よりも段々閉合せ候處昨年と歟粗英人へ御□手合有之候處中々内地之測量は不容易ものに近年英國におゐて測量有之候處英國中之測量幾百人と歟相かゝり幾年と歟を費し幾百萬金之入用有之候よし輕易に不可致事に付先日本におゐて御見合に相成後年にも可然と申候由左候へは容易に御取かゝりは御六つヶ敷事と奉存候得共節角大政官へ出し吳と申候相頼弟も其節如此大段之事とも不弁候故差出候は、御衆議可有之と申候處右之次第故如何歟と奉存候乍去弟之又承り違ひ歟も存不申候間一應御評議被下何分之儀御付紙可被成下奉願候先は右而已申上度御留守に御筆硯を頼み奉呈上候草々頓首拜

七月廿六日

尙々乍失敬別紙土方氏へ御渡し奉願候拜

木戸孝元文書卷九（明治二年七月）



一〇〇 大村益次郎宛書翰

明治二年七月二十六日

今日は態々御繁務之央御光來奉萬謝候參上可仕之處私は御無禮仕候御了  
簡可被下候

一 蝦夷地之事開拓懸りと歎より何歎愚論を出し御省之手は御はなしに  
相成候歎之由無余儀御行かゝり歎は存不申候得共昨冬此事件は先生へ  
も入々申上且御熟按之上に断乎御決定と相成壹萬余人之其所を得ると  
其上不毛之地を不勞して開拓いたし候良策公私之爲無此上事と相考後來  
之爲にも訖度手本を相殘し置度儀と盡力も仕候處今日に至り瓦解候は  
いかにも遺憾千萬に決而開拓に十分手を下し候事は不相成儀必然と  
被存申候付は一時之處より萬余人之爲にも相成らず公の爲にも不相成  
は殘念千萬に付此上之模様を以可相成は軍務へ御受取置後來之目的を

訖度御立被成置候様千禱萬祈之至に御坐候吳々も無御容赦御引受之處奉  
祈候

一 軍艦論今日拜聽仕實に御尤千萬と奉存候元より御熟按之上に別  
申上様無御坐候得共行末之處是非々々海軍は

朝廷におゐて御惣括無之は不相叶付は此度之機會に其目的丈けは相  
立候先薩藩へ其儘御預けと申都合にども相成候は如何之ものに御坐  
候哉又

朝廷御艦之内不宜分有之候は春日艦にても御受到に相成不宜分御拂に相  
成候は如何是等之事申上候は佛前之說法甚赤面至極に御坐候得共是非  
好機會を以海軍は必

朝廷之ものと申候基本相立度無左は日本之爲にも又却る諸藩之爲にも  
相成不申と乍卒爾苦按之余一應申上試候  
先は右申上度其中御道中御自玉邦家之爲第一と奉存候草々頓首拜

七月廿六日夜

允 生

（藏六は大村益次郎）

藏六 先生御密拆

（大村は大村益次郎）

一〇一 榎村正直宛書翰 明治二年七月二十七日

朶雲御投與い曲致拜誦候彌御清安に御盡力珍重此事に御座候大村氏も彌今日出立に付何卒御同志中被仰合此機會に御地之處得と御締り有之度何卒且々流儀に入候ものは御容れ被成御旨諭之處第一に御坐候過日も得貴意候通兎角御地よりも如海江田表裏之事申來候に付人心益疑惑を生じ煽動するものは彌得機會申候御地より端を亂し候氣味不少候に付其根穴を穿ち置度事と存申候其も必竟は東京之根軸一刀兩段之決無之故生じ候事に其罪は元より政府に有之候得共其策行ふに術なく忽決忽揣朝變暮移去とて對世人猥りに罵り候譯にも不參痛慨此事に御坐候御降察可被下候一 西洋書本譯もの事は民部省へ申通置候全體御地之書林へ手を被下候

（海江田は海江田義信）

御世話無之は行とゞき申間敷御閑隙之節御一按是祈候

一 兎角御地東京之游民漸を以其職を知り候様御工夫有之度と存奉候壬戌甲子より其員幾倍に至る游民之多きは自然と國之弱溺いたし候を不知々々欲し候譯に又今日之一患に御坐候東京も今一入出入窮困候上は且々一都府之形ちに復し可申歟只今之姿は堀内寄組屋敷之大なるものゝ如きに御坐候佛前之法談一々赧顔而已に御坐候先は任幸便一書差出候草々頓首

七月廿七日

允

（十八眞は横村正直）

十八 眞 兄御密拆

一〇二 岩倉具視宛書翰 明治二年七月廿八日

尊書奉謹誦候先以 御清雅に被爲居恐賀無限奉存上候さては被仰聞候秩祿取調書類悉皆返上仕候如房方之分は兎も角も御一統之秩祿に付候は

大に世上におゐて議論有之從來草莽中にも  
朝廷之御爲粉身盡力終に溝壑に投し候ものも不少然るに堂上過半は姦吏  
に阿諛し御一新之際天下之賞典も不相舉内却る恩祿を賜り候など、申事  
はなと喋々相論じ實以耳やケ間敷事而已に御坐候天下之賞典と申候も  
も目途も不相立事に御坐候へ共至誠  
朝廷之御爲に盡力仕不幸にして相斃候もの哉其外御一新前有功之ものは  
何と歎御詮義有之候上に於秩祿之事も御發表相成候は、人心之居合別  
可然御事歎と奉存候節角之御事に付御發表之上種々之議論有之候は  
朝廷之御爲如何と奉存候間眞に極密不願不敬無腹藏言上仕候御一覽玉り  
候後忽御投火奉願上候草々頓首奉復

七月廿八日

（此書は宛名署名を缺くも木戸孝元が岩倉具視に致せるものなり）

一〇三 大津四郎右衛門宛書翰

明治二年八月一日

爾後彌

御清榮奉大賀候東行後往來甚稀にして巨細之御様子不相窺候得とも定  
御愉快に御消光と想像仕御浦山敷奉存候弟も春來始終不快に一時は尤  
困却仕候漸百方之盡力相徹し此頃得閑地先日より宮根温泉へ保養に罷越  
申候此節は余程其驗相現れ快方に趣き申候御承知被下候何歎と御案じ  
被下候事と想察仕候處最早當分は氣遣有之間敷候娑婆之年季未不濟事と  
被思申候近頃御無沙汰仕候に付一書奉呈候先は其中時下御自玉第一に奉  
存候何歎新話も御座候は、御洩し奉願候草々頓首拜

八月一日

尙々近頃御飲量如何必々余り御大飲は不宜且は是迄大飲家刺終をいた  
し他日其害相生し忽一命を投し候もの不少必々御用心被爲成度奉祈候  
以上

松屋は大津四郎右衛門

木戸孝九文書卷九 (明治二年八月)

松屋老兄御直拆

四百八 允

一〇四 大村益次郎宛書翰

明治二年八月一日

前略さては其後紛紜之趣も随分私も根しこく彼之處へも何となく持込上之方へも訖度極論仕置候處此節如何之事歟是非先生を御とゞめ申候様に申出候且黒田了も軍務ならば御奉公仕候と歟私は未一向相分不申 先生御唱は京都之軍務官之御用相濟候へは先休息々と申位に御申置可被成候色々引たりつひたりして見るものも有之申候其中には病は有る處益相知れ可申候先は爲其草々頓首拜

黒田了は黒田了助に隆て黒田清

八月一日

御密披

(此書宛名署名を闕くも木戸孝九が大村益次郎に贈れるものなり)

一〇五 伊藤博文宛書翰

明治二年八月朔日

亂筆御推讀奉願候宿はイセ文可然歟とも奉存候其中思食も有之候はいか様とも可仕候以上

大隈は大隈重信

過日は朶雲御投與拜見仕候折角大隈を可相尋と存居申候處却被相尋折柄客來有之十分不盡意残念に存申候間翌日直様相尋候處不在故不得止一書相殘し置申候彌今日出立明日御地へ罷出申候間何卒關門之都合等可然御手数奉願候密情段々御晰申置度候随分込り候事多く早晚も々々不面白事而已に御座候先は爲其草々頓首

八月朔日夜

品川驛より

芳梅 兄御密拆

鐵面生

芳梅は伊藤博文

一〇六 大村益次郎宛書翰

明治二年八月五日

木戸孝九文書卷九 (明治二年八月)

四百九

(大隈重信)

(前文缺) 出浮可被成候是又前途之御仕事を被成候一手段に御坐候

一 軍し金之一條過日申上置候處其後大隈に面會仕見候へは當暮來年に至り候へは諸藩之中より惣勘定爲致候其計は

朝廷へ差出し候都合に不相運は不相成候に付一藩々々軍費金難取と申候成程道理は左様に御坐候へ共現場之實事如何可有之歟と愚考仕候自然現場不被行ときは軍費金を不取丈ヶ却る損失と相成申候實事之舉る目途相立候上に廢し候も弟は不運歟と相考申候大隈に面會仕候へは此事今一應相論へくとは存申候得共大隈も當局に其見込相論し候に付前以一應申上置候御含も可有之と奉存候弟之考に藩々より餘計を取立候事は大分間合之有之候事と相考申候乍去漸を以不相運は不相成候只ものは運びをつけ候事第一に勇斷尤其機を不逆事肝要と奉存候平生は却る婦女子之如きがよろしく却る運ひ之便利歟奉存候張良は勇斷萬人に傑出し而して天下之事を運ぶ千古の一人尙進退坐作之助る處多しと云

(井上は井上馨)

一 蝦夷一應申上候通昨冬百年之見込を以斷然相決至今日動搖いたし終に全策を誤る如何にも遺憾千萬先生之高説有之候得ども其中には日月相過其損益不可言故に不得止大議論を起し前に相復し井上へ申含め候申遣し候此後之御都合も可有之に付申上置候

一 京都刑法官之薩人大に軍務官之論に反し候事を企候事不少其元因は逐々承り人説不可信候得共昨年於東京徳川人に被欺京都へ被逐返候事なども含み居候と申事に御坐候元々小人と申事は逐々承り及申候此度於御地も於先生は申も疎至極元より御氣遣に不能事に御坐候得共軍務一般之御取締を基本と被爲成候刑法官之責は他より訖度御通り込置被成候方必御都合可然と奉存候其には横村などを御指揮被成候は必相盡し可申と奉存候

(横村は横村正直)

先は右申上度奉呈候其中時下御自玉第一に奉存候草々頓首拜

八月五日

木戸孝九文書卷九 (明治二年八月)

(此書宛名署名を闕くも木戸孝元  
が大村益次郎に贈れるものなり)

一〇七 伊藤博文宛書翰

明治二年八月七日

大亂毫御推覽可被下候左候必御投火奉願候

爾後御清榮御盡力奉大賀候過日は色々蒙御高意萬謝奉り候毎々御多務之  
央を煩し甚恐入候次第に御座候弟も蘆ノ湯と申處へ落着申候兩三之茅屋  
而已に一山村之真趣其故宿屋等は随分不潔に御座候得共久々に幽靜  
之境に入り別世界之こゝち仕候先々御安慮可被下候

(大隈重信)

一 大隈氏は出浮に相成候哉違約に相成甚以不都合至極に御座候得共委  
曲は兄へ御嘶申置候通之意味に付御舍被下可然御致意奉願候今日にも  
來着相成候得は無此上候得共現場必六つヶ敷事と想像仕居申候  
一 粗御嘶申置候通軍し金論實に大隈之説至當に御座候得共現場之實事  
如何可有之哉必諸藩今日之勢に於て勘定仕候出候とも一年之會計に

亦も不足之勘定に可有之いづれ巨細に御手も不入は不相成事に御座候  
得共極々微弱もの而已迫り立候譯にも參りがたく他日は屹度兵力之實行  
に無之は十分之功能は無覺束歟と愚考仕候乍去是以猥りに口外は不相  
成兎に角實事之相舉り候まで名目は何にても軍費金丈けは御取立有之候  
方必可然と奉存候實事之舉る目的相立候上に被廢候亦も必不遲事と存  
申候此金一年九拾萬兩余實に兵備之一助と相成申候必是は按じものにも  
御座候得とも大隈氏へも御一論被下度大隈氏之説於道理至當に御座候得  
共現地之處容易今日之勢に於て難至と存申候

一 朝鮮論元より一朝俄急之説に於て無之決る毫厘も損害は無之他日却  
大方向を開き候一端と存詰其損害無之所以は權我に在る精々實事を推し  
候上止むるを利とすれば必止進を利とすれば必進進止自在之宜は必其時  
に可有之今日十分意味之通徹不致は昨年六月以來之大憾にて大に力も墮  
ち申候自然も是きりに於て吳々も不堪殘心之余不覺又々相認申候語るに

人甚稀少而して尙兄之不得深察快答は天乎何乎不存候得共生外之大一憾  
に御座候

一 一夜之御高論實に感服之至に奉存候人主たるもの元より舊習に安し  
其治を不動ときは萬國各立之世之中国人民日に文明に化し人是を取るにあ  
らず我是を捨る之理に上下實に不可有不慎乍去幾千百年之舊弊人民亦  
其恩を蒙る不少萬人之中是を聞て忽悟るもの未滿一人然るときは天時未  
至乎慢に論し候時は却る今日國を醫するの良説に無之歟と竊に愚按仕候  
吳々も先近きより遠きに誘ひ雖愚正直なるものは必憐て我黨に入謙讓を  
以天下に推す之次第は相立經國之條理は斷乎不狂様有之度尤條理も亦一  
より十に推し十より百を推し是則緩急順序之不得止もの歟と奉存候而し  
て終に貫候處は必力之有無に關係仕候元より迂説愚論只々御一笑候まで  
之事と奉存候得共臥る未得眠任筆床上に認め申候尙御叱諭可被下候  
一 近況御序も御座候は、御洩し可被下候いつ頃浪華へ御出に相成候哉

可相成は弟も一旦西遊仕度御切迫には困り申候得ども御様子承知仕度  
奉存候

先は右貴意を得申度呈亂毫候其中時下御自玉第一に奉存候草々頓首

八月七日

鐵 面

芳 梅 盟 兄 極 密

(芳梅は伊  
藤博文)

一〇八 廣澤兵助宛書翰 明治二年八月七日

御推覽奉願候必々猥りに人に御示し無之様奉願候自然御答御座候は

、御裏書にて奉願候無左候は、拜青之折御返與奉願候拜

過日一書呈上仕候處御一覽被成下候哉亂毫至極總る煩御推判候事と奉存  
候爾後彌以

御清榮に御盡誠奉大賀候弟も蘆ノ湯と申候はた宿より右曲し一里ばか  
り之山上に尤寂寥只三兩家ある而已にして一鳩一雀を見ることも六つ

ケ敷別世界のこゝち仕未湯治之相應不相應は不相覺申候得共心持ばかり  
にても眞之静味をおほへ脳痛之苦も忘れ申候如此處故宿屋之不潔には隨  
分困り申候乍去是位はと相明らめ申候已に當所にも尙外々之湯にも外國  
人參り彼等不絶と申事に御座候旁御降慮可被下候參り懸け横濱へも一日  
罷越はた宿までイ勢翁同行仕候中村も同日山を越し候得共少しの違ひに  
あイ勢は見島沼津には相會し候事と被考申候于時段々薄々と傳聞仕候  
に付先書相呈候節そつと御耳に入置可申と奉存此ケ條丈け失念仕爾後不  
得幸便延引仕候乍去大に天下之事始終之事名義にも相係り候に付是なり  
にても不宜と奉存候に付不取敢存分申上置候機宜は何卒可然御料理奉仰  
候彼御賞典之事に御座候薩州より御斷り之趣道理を以被仰上候方可然  
との説も有之また御國は今日之事三條公方と初發より一致一力之御都合  
に御盡誠被爲在今日三條公方毫厘之賞も御頂戴無之に兵馬之事は申に  
もせよ一兵卒にも相加り候丈け之大賞を被爲得三條公方と初發一致不容

(イ勢は伊  
勢氏華)  
(中村は中  
村誠一)

易御忠情に基き候ときは偏頗に於

朝廷不被爲得宜は元より御國におゐても不安堵に可有之など、種々議論  
も有之候由成ほど筋を傳ひ其條理をたゞし候ときは左も可有之歟御國に  
あも尋常一樣に御黙如にあも實以不可然御事歟と奉存候御高按之上可  
然冥々に御盡誠奉祈候愚説は元來此度之賞典甚以不同意至極に成程賞  
は賞に無之あは不相濟候得共根元今日之事  
皇國を維持仕候と申事銘々之忠情に眞目的に御座候得は決る過分之賞  
有之候あは不相濟と奉存將來之大勢を論じ屢昨年來も建言仕候得共一向  
御採用無之如何とも難致是等も  
朝廷之御失徳に終には相成候事と奉存遺憾之一端に御座候愚論は上功中  
功下功と分ち上功は三十年中功は二十年下功は十年とたとへ石を以被下  
候とも御國御意銀之譯にいたし幾萬兩幾千兩幾百兩と申事にあ必可然と  
相考申候左候へは將來屹度



皇國之御爲にも相成尙此往き外國と戰爭有之候も決る又無賞もは不相成事にも西洋各國といへども一時之賞無之處は無之無左るは決る國は不强と存申候然處一旦被相行候後故如何とも難致御斷り申候とも丸る朝廷に御引受遊しと申事にも參り申間敷付るは此處に機宜料理之都合有之候歟と奉存候其手段は薩長より強御斷りを相願其道理は被聞食乍去功勞之處は厚く被思食十萬兩三十年玉わり候と申都合に被仰出候は天下列藩皆其例しに隨ひ可申然る時は百年之後を救ひ候一手段とも相成可申歟と奉存候無左るは版籍返上だの何だのと申様々之事も擧る水泡に屬し兒戲に陥り可申歟と奉存候長州之足輕風情之ものにも一時之功を以永賞を玉わり

(君上は毛利敬親をいへるなり)

君上條公方身家存亡を不願今日之回復を御誓ひ游し候事は天下知る人不少然るに如此不都合偏頗有之候に安しは長州は實に總而鏡面皮國と相成可申歟と奉存候老兄之外申出候人も無之尙御深按可被爲成下候前申上候通御

料理之都合成就仕候とも最早上中下功之差別はなしがたく乍不都合も三十年に總る不被仰付るは相成間敷往々於會計も終に目途は相立間敷皇國前途之爲今日之機不可失と奉存候身雖在山中持病兎角に發起時事難忘且御國と條公と之御間之如きは義と大義之かゝる處名利之判る、處今日に不盡は無時と奉存不取敢申上置候御熟考之上可然御盡力奉祈候先は右申上度其中時下御自玉爲邦家第一に奉存候草々頓首九拜

信賞必罰は治國之骨に御座候處備賞

八月七日

備野天下不瓦解は必土崩實に御同歎之至に御座候尙々今一廉申上度事御座候得共云ゆる意心傳心之事に付難盡筆後之好

機會に可奉窺候于時認想像仕見候得ば朝變暮移人情如紙には痛慨に堪へ不申此際は嗚々御苦慮御盡誠と奉遙察候弟もどうも温泉之經歷修行仕度他日又可相窺候間宜御盡力奉願上候拜

障岳老兄御密拆

松菊生

(障岳は廣澤兵助)

一〇九 伊藤博文宛書翰

明治二年八月十五日

(前文缺) 候事も今更不待辨依る如貴論於愚案も本蝦夷丈けなりとも確然保有之  
 目的不相立るはと存詰昨暮於東京留守諸卿へ論極いたし會津人を彼地へ  
 移し開拓之目的屹度可相立と軍務へも示趣相論し於軍務も日月を期し  
 可奏成功之約定まで仕逐々其手段相盡し申候兎に角人を移し候事急務に  
 る其人は堪難難候者尤肝要に一万余人之人員を相移し候事於此舉は誠  
 に公私ともに得宜候譯に御座候處其總括無之るは成功まで之目的甚無覺  
 束候故數度苦慮を盡し候上必至盡力いたし候處已に此度出立前御沙汰變  
 りに軍務之總括を被逃開拓使へ被附候と歎此一事にるも前途之目的決  
 る難相立譯にたとへ軍務に管轄被仰付候とも軍務國に仕候譯にるは必  
 無之成功之上は開拓使へ屬し候事は當然に開拓使之開拓する所以は全  
 島之形勢を一覽し一隅にるも開拓之目的相立盡誠仕候もの有之候ときは  
 得と其情實を察知し候上は胸懷を開き信任いたし候る其實行を督め候様

(廣澤は廣  
深兵助)

無之るは周圍誠を遂けしむる能はず兎に角一應は御辭退無之るは相濟聞  
 敷と密論し元より其成否御承知之情實故不相分事と存候處不圖昨日小野  
 爲八御使として東下此度返上御辭退に相成候由態と立寄申聞け候廣澤へ  
 は道理を以會る懇々相論し置元より異論無之事と存候付るは何卒此機會  
 に皇國を維持候示趣云々辭退歎願其忠情無余義趣被 聞食候乍去其功勞  
 難忘被 思食十萬兩宛三十年下賜候事 當時之わしにして壹萬石三十年被下候に  
當り申候是に戰死之者不具のもの且々可  
 是と申位に薩長始被行候は、必諸藩も此轍に至り可申候一旦堂々と如  
 此御沙汰に相成候事いか、會計御難澁と申候も御變換も御六つヶ敷可  
 有之其上下天下之人心にも關係候事に付此度薩長歎願之處より被行候へは  
 朝廷において御變換被成候に無之下より歎願候も無余儀至于此候次第に  
 る名も屹度相立且此賞之半を當候も後世屹度有功を賞し不絶御作興被  
 遊賞罰之賞も舉り申候何卒々々此機會に御盡誠爲百世致祈念候尤有限有  
 功之もの血食之不絶丈ヶ之事は政府之本さへ相立居候は、幾百里之大島

決る開拓之目的不相立而已ならず却る我より捨廢いたし候譯に相成申候  
 兎角争小權庄屋之暇を隣村とむさぼり候様之心底よりして全局之事を誤  
 り候事不少尙此余も可成丈け人員を移しサーヤ邊よりして要衝之地へは  
 他日府縣も屹度相開き候様基初を立不申るは不相成必竟是等皆開拓使  
 之任に而向内争小事候より内を束ね大に魯人之欲を塞き候事尤至急之義  
 と存實に過日之行がより黙緘仕居可申と存候へ共昨年來之苦心水泡に屬  
 し候而已ならず前途を推考仕候も遺憾至極に付已に出立前兩三日大に  
 激論を以條岩二卿へ上言し漸廿九日朝如最前御沙汰戻り候段大久保より  
 承知いたし抑安心仕候る出立仕候幸此度東久世卿始井上其外御撰用にも  
 被差越内外之別を明にし全島之形勢を睥睨仕候る盡力有之候は、成功日  
 を刻して可待本蝦夷に根基相しまり不申るは唐太も決る手を入候事六  
 つヶ敷只々勞むる而已に陥り申候本蝦夷に根基之屹度相座り候事至急之  
 事と奉存候會る御一話いたし候通閑叟公議定を御外しに而は決る不可然

(大久保利通)

(東久世通禧井上馨)

(閑叟は鍋島齊正)

(副島は副島種臣)

候事と存屹度上言いたし置候處閑叟公は又是を名として議定之職を御逃  
 れ被成候之策有之兩間に立情體を窺候得は見よりも明に候間未發に盡力  
 仕候處已に々々不被行之折に而再三にして相止み申候今日又如此に至る  
 實に多務之際遺憾之至に御座候根軸屹度御悔悟無之而は必又他日之變移  
 不待言と奉存候副島已に魯を伐之論を立此度之事副島默視不仕事と推察  
 仕候今日之論如何弟も乍不肖浮沈之間を経過仕候に議論と申もの愉快に  
 して却る其實之可見もの少し實行と申すものはあかり兼候ものに御座候  
 遙に過去り候て聊づゝ相顯れ中々聲之始に響動仕候様之ものには無御  
 座候三藩之兵出張論妙計に御座候得共元來出兵之主意轉動仕候事に而不  
 被行必然と相察し申候勤王之主成は

皇國を維持仕

皇威を更張いたし候譯に而可有之付るは弟最初勤王之藩に候得は元より  
 強弱は不問其心を束ね回復いたし度と而已存又俄に今日之盛事に遭遇仕

候事とも不相考乍去至今日候は天其時を與へしなり七百年來之來弊多少  
緩急之驅引は有之候にもせよ勤王之藩は不及申勤王之士不可有不盡然  
に世之事總而浩歎而已始あらざるはなし終有るかたし願くは終を思ふ人  
を募り終を遂る之策を不定は以何十年之後を可救哉況百世之後おや今日  
之源由を竊に推想仕見候得は血涙雖盡尙難言盡御高諭是仰候

一 賞典論實に永世に涉り終に

皇國之興廢に相係り候事に付昨年來種々苦心仕色々愚考いたし候處元よ  
り治亂とも賞罰無之は人心を鼓舞し智勇は各其智勇を盡し國家に忠誠  
を遂けしめ候事不能功あるものは賞し罪あるものは不罰はあるへからず  
後來

皇國興隆仕候ときは干戈を以各國とも争ひ又は議論を以相責め必竟は其  
無禮をたゞし我國之道理を立人民を安堵いたさせ候義に候得は其事之大  
小により賞罰必可有之然るに今日之賞は當時に限り決る後來は如此賞不

(君上は毛  
利敬親ない  
へるなり)

行との事なり然るときは後來は只罰而已なり天下之事信賞必罰を以萬億  
を御するに足る其宜きを得る則政府之職なり爲に弟最前賞を三等に立大  
功三十年中功二十年小功十年然るときは百世之後と雖も有功之士は賞す  
るに足り百世に涉り朝廷に偏頗なからしむ依る昨年來數度建言仕置候處  
如何之御評決に候哉終に此度之義に決し已に相發し如何とも難致雖然今  
日に料理無之は後來益信を天下に失し不可束之形情に可至と存折柄薩  
州にも一應返上之願ひ致し候趣承知仕候に付好機會と存冥々に盡力いた  
し是非御返上可然之議を立其説に曰く君上積年之御忠誠今更不能論候得  
共昨年來戦地は御出張と申事も無之廟堂上に御盡力と申事も無之兵士  
四方へ出張仕候は元藩弊之御任に昨恐君上屢御位官始御寵賞を被爲蒙  
元來今日之其始め推窮仕候得は實に三條公とは其始終を共に被遊候御同  
志に三條公には御一新以來鞠躬御盡力未一片之御賞も不被爲蒙齊敷朝臣  
に被爲在如此朝廷上偏頗之事可有之道理無御座名義においても御至當と

も不相考且後來を推考仕候は如此賞典被爲行候は

皇國をして百世に維持仕智者勇者をして各其器量を盡さしめ其忠

(廣澤兵助)

朝廷において御世話被爲遊被下候不苦事歟とも相考申候尙廣澤へも論

(名和 緩)

し越置内々名和へも屹度申越置候尤冥々之御盡力肝要に奉存候

一 彈正臺如何相成候哉進退黜陟總之相關し實に體裁不相立而已ならず却る彈正より讒被行候様成行小吏に至りては終に不能安其職弟等實に不得媚從候とも終に默從は不免様相成申候往々困り候ものにて御座候創業之時を不知何以當創業時動搖も多くは是より生し申候

一 前原如何同人も堪一事候得共此節之偏論に荷擔仕候は往々之御爲必不可然竊に苦按仕候弟などは近處もこゝろもちあしく候

一 佛前之說法不知言之極に御座候得共必々屢激論討論はよろしからず又不面白此往は此往ほど御療治之巧拙にかゝはり申候無御撓御盡力只々祈念いたし候先は爲其草々頓首奉復

八月十五夜々半箱嶺

絶頂に認

尙々弟も世事之事飽果申候幽靜之境に化し今一入保養仕候は、人並にも至り候歟と相考申候乍去兄達之御強壯は元より不及事と望みも不仕候乍然彼遠遊一條之念は未能消必々時至り候は、御助力可被下候吳々奉願置申候彌廿日前後之御立に御座候は、拜青も出來申間敷殘念此事に御座候然し賞論之一條は精々御盡力奉祈候井上も大強壯に可有之余り強壯不過様にと存申候兄も井上には一舍位は御譲り無之は最早相成間敷弟兄に譲る事は九舍御啓察可被下候于時小野爲八寫眞之事之内願あり兄へ願ひ候様申置候御多務中ながらどふと歟御世話可被下候呵々

(此書宛名署名を缺くも木戸孝尤が伊藤博文に贈れるものなり)

一一〇 森寺常德宛書翰 明治二年八月廿二日

朶雲奉拜誦候さて此度不何寄如此山谷中へ態々御來訪實に不知所謝只管奉恐縮候昨夜は折角御光來被成下候處何之風情も無御座萬御容赦奉仰候且又拜青之上い曲可申上と奉存候得とも態々蒙御召候は誠に以恐惶至極身を措候處をしらす何卒此儀は御了簡を蒙り奉り度奉存候偶罷越候儀に付今少々加養仕候得は早速歸府可仕乍去近來兎角不快勝に不堪事却る御安危之際要路を塞き居候も甚以不安奉存片時も苦慮に不堪何分にも此邊も奉蒙御垂憐度たとへ何地に罷居候とも前途之御爲と奉存候儀は元より不省迂遠獻芹之微意決る忘失不仕候に付此段不惡奉願候先は御答まで一應奉捧呈候草々頓首拜復

八月念二

尙々此品甚輕少至極に御座候得共山中に於一向呈上仕候ものも無御座

(森寺は森寺常德)

森寺 先生拜復

允

眞之御まぎれに呈上仕候御一笑を玉わり候へは幸甚之至に奉存候拜

一一一 檳村正直宛書翰 明治二年九月十日

亂筆御推讀可被下候弟も長々不快此節少々快方を覺へ申候御安意可被下候

(靜は靜間彦三郎安は安達幸之助なり)

過る五日御認之朶雲此曉山中へ相達忙手致披閱候處豈圖大村氏一條云々實に驚愕之至に御坐候然處天哉性命無恙と申處に至り不覺欣躍大安塔仕候且靜安二氏大村氏家來實に可憐之至に御坐候一旦御一新に至り候とも宇内之大勢に相對し候ときは皇國之危急は益切迫之次第に於屹度前途之目的不相立候は中々以御維持容易之事に無之彌外侮を受け終に不可復之地に可至悲歎苦痛之至に御坐候根軸不相立は

木戸孝九文書卷九 (明治二年九月)

四百二十九

皇國之爲に相盡し候ものは彌災害を引受け候譯に實に殘慨之至に御坐候何分にも嚴烈に御所致無之は不相濟乍此上精々御盡誠是祈候逐々傳承いたし候處久留米と肥後とへ浮浪潜集いたし居候由肥後之分は鶴崎に潜集と申事に御坐候久留米は古松澗二參政と歎申ものに一藩中におゐては大に權を張り甚勢強く政府に敵對不致るは是非今日之皇國之御爲には不相成と主張いたし佐竹も辟論主張浮浪等も入込候一説有之申候萬々一も此度之賊徒自然京都を免れ候ときは困窮之余は久留米肥後之間へ潜入致し候歎も難被計是非此度は一賊も不洩様に御詮儀只々相願候實に々々

皇國前途之目的も不相立かゝる危急之際

皇國內に如此國有之候は所詮往々之算も難相立必竟其元因は根軸不相締而已ならず昨日は開國今日は攘夷朝變暮移昨被罪今被賞人心不知所向種々手段を盡し候も一時々々之事と相成憤慨痛苦に不堪候東京之大橋

照壽と申候ものへも氣脈連通いたし逐々水府之辟論連を又々煽動いたし候と申説有之申候根軸實に一覺不致るは今日之姿に於ては如此輩益増長可致候先は御答旁呈亂筆候大村氏之疵所も速に相癒かしと存申候其中時下別々御自玉第一に奉存候草々拜復

重陽後一日

尙々對州之多田莊藏と申候もの先年來御國之余程御恩にも相成一昨年被縛近藤勇に被遣候由元來其も一時之助命策に於て有之候事は不足取事に御座候得共近來己之短を不知

朝廷に不被用を憤り頻に浮浪中に往來いたし長州之事なども様々申なし三十日程前にも有之候歎所詮東京に於ては事不被行故西京に於て事なすと歎何と歎申候る浮浪七八人と西上いたし候よし可用立奴に於ては無之候得ども惡もの、手引位油斷不相成乍序申進置候以上

十八 兄 内密拜復

米山人

(十八は横村正直)

(下文は別紙なり)

(木戸孝允周防の系米村に住せしを以て系米とも米山人とも稱したり)

兵部省之内にも段々面従服非之徒不少賊徒此中にも難計今日之次第に

朝廷上も實に油断不相成得と大村氏にも御尋被成候至密に御詮儀有之度奉存候何となく左様之風聞有之候様にも聞へ申候

一一二 大村益次郎宛書翰

明治二年九月十日

亂筆高恕

(横村正直 河田景興) (四日之一條は大村益次郎の刺客に遭ひしをいふ)

今曉横村河田二氏より之書翰東京より相達披閱仕候處去る四日之一條云々甚以驚愕天未棄之處に至り弟も亦蘇生仕候心地不覺欣躍今日之幸此事に御座候兼々御同歎仕候通兎角朝變暮移必竟上よりして方向を亂り候事不少只口に而已御一新々々と唱候至皇國之危急は去年より今年に相迫り居候事を不知憤慨之至に御座候根軸

不相立事に付一向嚴烈之御政令無之

朝憲は益衰廢前途之爲苦痛に堪へ不申抑此始末より訖度

朝威立と不立にも判然仕候儀に付天下へ燎然たる嚴令御示し無之は如何とも難致或は坐し或は起遺憾至極に御座候乍去御同様に皇國內之人故

との手に致し候も且々報ひ候之策無之は不相成儀に付何分にも鄭重に

御療養迅速御快復之處只々奉祈念候先は不取敢御見舞旁奉呈候先は爲其

草々頓首拜

九月十日

尙々弟も爾後少々は快方に趣き候歎に覺へ申候先は御安意可被成下候

拜

拜

益二郎先生御直拆

準一郎

(益二郎は大村益次郎永敏)

一一三 廣澤兵助宛書翰

明治二年九月十日

木戸孝允文書卷九 (明治二年九月)

四百三十三



年早晚大亂筆御高恕可被下候尙御推覽後は必々御火中奉願候只々老兄而已へ申上候儀に御坐候以上

(横村正直)

(大村益次郎)

(横井は横井時存)

爾後益御壯榮に御奉職奉大賀候二に弟も無異保養仕候間乍憚御放慮奉願候さて傳承仕如何哉と煩念致し候内横村より之別紙も到來實に憤慨之至に奉存候天哉大村氏も危急を免かれ當人之而已之事ならず今日之幸と於弟も蘇生之思をなし申候實に昨年來浮浪之驕傲甚敷朝憲を奉犯候事數かざり無御坐横井一條に付候亦も半年余も一向御裁決無之彌御根軸は廢馳之如く

御威光は日々相衰へ亂行此上増長仕候亦は此

皇國を如何せん逐々御同歎仕候通上の方に双方之顔面を御窺ひ昨日之罪人は今日在位之歷々に連り候様之事御坐候亦は一般之方向不相立而已ならず忽瓦解之外致し方無御坐と憂苦仕候訖度御嚴烈に御所致爲前途奉仰祈候逐々傳聞仕候に浮浪久留米と鶴崎へ潜集仕候由に承知仕候久留米は

彼古松澗二參政と歎申ものにも余程一藩丈け勢ひ強く横行今日之政府へ敵對不致亦は決

皇國之御爲に無之と之主論に亦非法無禮之事不少由鶴崎は肥後之攘夷連と浮浪相合し一説に河上顯齋なども屯居いたし居候由に相聞へ申候東京には其氣脈小梅之大橋照壽連通いたし居候様子にも近來又水府之辟論連を又々煽動いたし其舍中を相募り候由に承知仕候元々御疎は不被爲在儀と奉存候得共自然も此上不都合を生じ候亦は不相濟儀に付嚴敷御詮儀被仰付證跡之有之候ものは速に御手を被下候儀實に可然と奉存候佐竹にも浮浪相集り候と申一説承知仕未確證は得不申候得共是又油斷は不相成初岡敬治と申もの巨魁にも類に同類を募り候由に相聞へ申候實に佐竹は

昨年不容易危急之處

天朝之御力を以米穀尙金銀は不及申格別之蒙大恩漸御奉公を遂げ實行上におゐて藩屏之任に堪へ候と申處少しも無御坐もし上太閤信長如き之人

有之候ときは必其罰は不被免と相考申候至今日  
御政事之要害をなし候様之儀有之候は、速に被及  
御沙汰候も不苦御事歟と奉存候

一 過日來内々申上候御賞典論之一條も天下後世之爲め眞に  
皇國御維持之良法と相成候御詮儀に御一決相成候様奉仰候必賞と申もの  
も無之は不相成聖人と雖も信賞必罰之四字を以天下之人心を一定被致  
候譯に付必無之は不相叶候得共前途之不爲と相成候事には國を維持  
する爲之賞にあらず維持する爲にあらずされ今日政事は入らぬものと奉存  
候何卒後世に涉り御良法御一定被爲在度奉存上候乍恐過日も申上候通  
君上には條公方より格別に御寵遇に御超へ被爲游候はたとへ條公は大  
臣に被爲在候とも是は

朝廷之大臣には無御坐候間

朝廷之御體裁不相立而已ならず誠に以御不都合と奉存候實に彼是多端之

御苦慮不一形御事と奉遙察候憤慨之余承り候邊丈け申上候御手都合にも  
可相成歟と奉存候其中時下御自玉邦家之爲第一に奉存候草々頓首拜

九月十日

尙々京都も浪籍ものども、困窮仕候上は自然久留米肥後佐竹へ潜入仕  
候歟も難實に 御國內に今日如此處有之候は不相濟終に御政事之妨  
と相成申候此度は十分に御着手有之度奉存候多田莊藏近頃自分之不都  
合は不相辨  
朝廷へ不被用を憤り浪士に組し類に奔走仕候由彼も東京には事は不被  
行西京に盡さねはと歟申三十日前ほどに浪士どもと西上いたし候由  
不足取奴に御坐候得共惡事之小手引位は油斷不相成實に可惡奴に御坐  
候以上

（此書署名宛名を缺くも木戸孝九  
が廣深兵助に贈れるものなり）

一一四 伊藤博文宛書翰

明治二年九月廿四日

亂筆高恕

過日は態と朶雲御投與無間御歸港之御様子に付東下掛け出港仕見候處一向御左右不相分何歎御多事と致想察候先日は御愛兒御不幸之次第實に御愁傷之程遠察仕候且つ老僕まで死没之由御不仕合而已相繼き何とも御氣之毒に奉存候どふぞ細君へも可然御致意可被成下候弟も入湯相應仕候歎大分快方に赴き申候御安意可被下候山中以來一向世間之事も承不申候過日大村氏一條は早速承知仕候誠に以憤慨之至に堪へ不申此一條丈けは判然嚴威相立不申而は隨而何も歎も益大へちやもくれと獨り氣をもみ申候先は一書相呈度草々頓首

(大村益次郎)

九月念四

尙々早々御歸港有之度渴望仕候以上

芳梅 盟兄

干令生

(芳梅は伊藤博文)

一一五 大村益次郎宛書翰

明治二年九月廿四日

日々秋冷に相趣候處爾後御疵所如何被爲成候哉漸々御快方と奉存候實以此度之次第憤慨之至に而此決末之判然相立候處も不相立とにて

(横井時存)

朝廷之軍務官も其而已に成行隨而朝廷は益地に墜申候差向軍務官におゐて片時も安堵旋延罷在他事に相係り居候時にあらず當春横井之變におゐても朝廷之御不心切思ひ遣られ在位之面々不義不信實以難安次第に付度々建言仕候得共根軸之變移歎息之事而已に而今日之事如此次第に又落入候而は其而已に而百事相廢み彌以此機に軍務一體之膽略相定不申而は不相成此度横濱へ参り書生にも面會仕候處にて違論無之此上船越にも訖度相論軍務官之面目相立相貫候處無之而益々腐り果申事是非々々御療養第一に被爲盡彌以軍務官之規模百世へ相貫き候様御盡誠無之而は不相成事に御

(船越 衛)

坐候間御快復只々千禱萬祈之至に奉存候先は御見舞旁奉捧呈候草々頓首  
拜

九月念四

(吉富は吉  
宮簡一)

弟も大分湯治相應仕申候先御安意可被成下候御家來之ものへも可然御  
致意奉願候吉富は如何仕候哉漸々快方と惣察仕候へ共又は大に安じ申  
候拜

(藏六は大  
村益次郎)

藏六 先生御密拆

干令生

一一六 大村益次郎宛書翰

明治二年九月二十日

(船越は船  
越洋之助衛  
なり)

任幸便一書呈上仕候漸々御快方と奉存候何卒御快方に相運候上は速に御  
東下奉待候都下之近情も歸り立に在一向相分り不申兼々御約束も仕候通  
他日根軸輔護之目的は軍務之基本之立と不立に有之申候事に付於于此益  
軍務之目面相立不申亦不相成事に御坐候間船越にも得と相論し彼も奮發

仕居中候乍去時々例之變移に彼も苦心仕候只々迅速御全快之處奉祈候草  
々頓首拜

九月念十

(藏六は大  
村益次郎)

藏六 先生御直拆

干令

一一七 林友幸宛書翰

明治二年九月

歸京懸けには必岩卿へ參上可仕候

(横井は横  
井時存)

横井一條御裁許余り御遷延どもには無之哉元來横井之身上を疑惑候とて  
爲其に罪人之御所致御延引に至り候道理無之私に人を殺し如此大典を被  
爲典候亦は實に不相濟弟は横井とは同局之人也天下後世へ對しかゝる鐵  
面皮之事は無之御折も御坐候は、被仰上可被下候(以下缺)

(此書末文缺は宛名署名明ならざるも木戸孝  
允が明治二年九月林友幸に贈りしものなり)

一一八 河北俊弼宛書翰

明治二年十月一日

（徳山世子  
は毛利元  
功）

亂筆御推覽可被下候徳山世子公には御謁被成候哉御序に可然被仰上  
可被下候

御一別後一向御無沙汰に打過申逐々御投書逐一拜誦仕候益御壯榮に御勉  
勵と遙察仕候如御聞及天下一變之形勢と相成此後之順序其當を得ると不  
得とに

皇國前途之御維持も出來可申歟必竟今日之世體に立至り候も全逐々憂國  
之諸友骨をさらし血を絞り其功勞艱苦より終にこの天地に遭遇仕候事に  
付實に對死者候も生前は度外に仕公明至誠に基き我

皇國をして百世之大略を相定め一步より相始め無緩延相貫き他日宇内に  
獨出する之根軸今日に有之則我

公多年御誠忠之始終相立寰宇御維持之御成業も御一新後之御奮發尤肝要  
と奉存候處弟之微誠天地に徹貫仕候事不能歟昨年後も不可言之苦情不少

（河瀬は河  
瀬眞孝）

積年爲國爲道と相交り候ものも却る疎遠と相成人情之輕薄可驚事にも無  
之元より孤立孤行に亦も是非々々宿志を不可忘と存詰候處又意外に其志  
を憐み吳候ものも不少且々消光仕候處昨年河瀬氏よりも書翰到來大略事  
情相認め盟兄へもい曲御嘶玉わり候様申越候處其後一向河瀬よりも巨細  
之返答無之如何哉と奉存候終に弟も春來より不快に亦一時尤困却將來を  
思ひ又已往を考へ候得は一日も苦憂に堪へ不申臥床仕居候處知己之すゝ  
めに隨ひ謝官暫山林に世事を忘れ専ら保養仕候處娑婆之年季未相濟歟此  
節は漸快復仕候近頃は

皇國內に亦の内外も少しは一方向と被思候邊も有之爲國爲君に竊に欣躍  
仕候乍去元より中々安心は相成不申候人情之輕薄かくばかり之もの歟と  
實に痛歎仕候事不少候弟未人之不良を不計人何如此歟と小二年只々涙を  
吞み暮し申候盟兄萬里之外より時々御懇諭不知所謝然るに兎角呈書も不  
得仕多罪之至に御座候只可頼は天意未我

(大夫は毛  
利内匠福  
原芳山をい  
ふ)

皇國を不捨處有之候歟と被考申候人事は不可知巨細之事筆頭に難盡候隨  
分御自玉他日一倍之御盡誠只々祈念奉待候乍失敬大夫方河瀬氏始諸氏へ  
可然御致意奉願候草々頓首拜

十月一日夜

一穗寒燈照眼明 默坐沈思無限情

回首知己人不見 丈夫必竟豈計名

世難多年萬骨枯 朝堂風色幾變更

歲如流水去不返 人似草木爭春榮

邦家前路不容易 三千有萬奈蒼生

山堂半夜夢難結 千岳萬峰風雨聲

夜坐思亡友

松菊狂愚生

御降察可被下候拜

義次郎盟兄御直拆

準一郎

(義次郎は  
河北義次郎  
に就いて  
河北俊)

一一九 林友幸宛書翰

明治二年十月三日

亂筆御免可被下候

昨日は態と御光來誠に御土産御惠投奉謝候さては昨夜岩卿へ罷出致拜謁  
候少々申上置事も御座候へ共余り時事に涉り候亦は却る我宿志之妨とも  
相成候に付精々相勤め可成丈け慨氣をおさめ何事も不角立申上置候乍去  
是迄稍前途之見通しを着け盡力仕置候事之端から崩れて參り候のには木  
石ならぬ故不得止五歩之魂丈け建言仕置候弟も元より時々東京にも罷出  
いづれ國の土か東京の土かに可相成候へ共一度宿志通り歸國仕度余り切  
迫に申上置候ては却ていかゞと奉存候に付程克其はしを御願申上置候に  
付折を以都合克御取成置被下候様精々御頼仕候世間之事更に望み無之暫  
風來ものと相成度只々是のみ夜白之一念にて御座候いづれの日氣運も有

之候事に付太平と相成可申候昨夜不日歸國之事も御願可申上に付よろしく奉願候位にざつと弟より一應申上置候事に付此ほとりのさめぬ中に甘く御周旋可被成下候偏に御頼仕置候世の中と申すものは北風るときは北風ばかりがよろしく西風るときは西風ばかりがよろしく其に舟も方向の方に相伸び人も物も其所を得申候北風中に俄に西風や東風か起り候は舟も人も或は死或は捨り申候得と御熟味被下候て折を以御落着之参り候様程克御周旋偏に御頼申候然る上は弟も氣樂時々東京へも隨意に罷出勝手に様子も相うかゞひ可申候東京で金も盡き借金仕候る歸り候ては國に歸る事はたい氣に御座候彼賞祿は御斷り申上度心實を以誠心一片に奉願置候もよろしく冥々に御はからひ可被下候先は爲其草々頓首

十月三日

木 圭

林 兄御内披

（林は林友等）

一一〇 大木喬任宛書翰

明治二年十月五日

拜啓先以

御清榮に御盡誠奉大賀候さては過日歸寓仕四方之流談様々承知仕弟病養生中ながら黙々承聞仕居候も甚以心事不安岩卿へ推参仕精々慨氣をつゝしむ愚意十分に建言仕置其後先生へ拜青仕度と奉存鳥渡爲相窺候處御外出中之由に失敬申上候近日御閑暇之折も被爲在候は、窺置拜話奉願度何分之御様子拜承旁奉呈候先は爲其草々頓首拜

十月五日

木 戸 允

大木 先生御内披

（大木は大木喬任）

一一一 高杉小忠太宛書翰

明治二年十月七日

寒冷日に相募候處先以 御清榮に御揃大賀此事に奉存候過日は態々朶雲御投與難有奉拜誦候私も春來兎角不快に殊に當夏東下後は病氣尤増長

木戸孝允文書卷九（明治二年十月）

四百四十七

仕強み出勤も不得仕素餐之次第と何とも奉恐入候儀に付百方歎願退養仕  
 七月下旬より醫師之促しに任せ箱根へ罷越頃日歸寓仕候仕合に而一向御  
 答も不申上何とも恐縮之至に奉存候平に御容赦奉願候右之仕合に而都下  
 之近情も得と承知不仕候得共世上随分騒々敷相聞へ申候然處歸寓仕見候  
 得は又々賞典被爲行且會津始余程御宥免之御沙汰有之居如何之譯歟と只  
 々仰天仕候までに而御座候時に觸れ事に觸れ兎角故友などを思ひ起し多  
 少之感慨相生し申候愚意丈けに而別紙辭表差出し申候御降察可被遣候さ  
 て又御示し之楠氏血傳拜見仕候一向是迄承知不仕候處不圖地に血流之も  
 の有之又老臺之此家に御宿泊被成候事も誠に不思議之譯に御座候御詮議  
 有之度事と奉存早速建言仕置申候先は乍延引一應御答旁奉呈候先般態々  
 御懇切御示教吳々も奉感銘候乍此上御存分に御高諭奉仰候其中時下  
 御白玉第一に奉存候草々頓首拜

十月七日

尙々別紙山中之癖作備御一笑申候敬  
 小忠 太老 臺拜復

準一郎

(小忠太は  
高杉小忠  
大)

一二三 大木喬任宛書翰

明治二年十月八日

采雲奉拜誦候先以御清榮奉大賀候明日明後日之間推參仕候様態と被仰聞  
 い曲奉畏候明九日第三字より登門可仕候此段御請まで草々頓首拜復

十月初八

允

(大木は大  
木喬任)

大木 先生拜復

一二三 菱田禧宛書翰

明治二年十月九日

亂筆高恕

寒冷相募候處先以 御清適奉大賀候さて過日御歸國之折は態と采雲御投  
 與殊に珍品御惠奉多謝候弟も頃日歸寓仕候位之仕合に而早速御答も不申

木戸孝元文書卷九 (明治二年十月)

四百四十九



上奉恐入候未都下之近情も得と承知不仕候隨分騒々敷被相窺申候閑散に居候得は脇目何目と歎申候論にゝ竊に前途も御氣遣申上候歸寓仕見候得は賞典も被行大に寛宥之御沙汰も被仰出居誠に難有譯には御座候得共難有過候也

朝威不相立也は又蒼生も得安し不申候弟丈けは切迫に辭表再應差出し申候何分にも當季より將來之御大策が大事に御座候先は御答旁奉呈候其中時下御自玉第一に奉存候草頓首拜

十月九日

（雪爪は鴻雪爪なり）

尙々雪爪禪師起居如何御序も御座候は、可然御致意奉願候山中にも彼是六十日ほど遊ひ申候少々は不快も復し候歎と覺申候例之出たらめ備御一笑申候以上

千里江山落眼中 々々江山則千里

山自幽靜水自清 日々相對我心喜

天地妙美人不知 人不知處却妙美  
大道可行又何妨 聖賢所解無空山  
君子如愚小人智 一時名利不足恃  
專此天真誰得禁 可憐世情如片紙  
分明眼中判是非 欲託生涯江山是

對江山

白水青山對月明 醉吟聊欲慰愁情

風流亦自多蹉跎 湖上却聞風雨聲

己巳初秋謝官養病于宮根溫泉偶逢仲秋謀同行賞月湖上以雨不果

仍而有此作

一穗寒燈照眼明 默坐沈思無限情  
回首知己人不見 丈夫必竟豈計名  
世難多年萬骨枯 朝堂風色幾變更

歲如流水去不返 人似草木爭春榮  
邦家前路不容易 三千有萬奈蒼生  
山堂半夜夢難結 千岳萬峰風雨聲  
夜坐思亡友

(海鷗は菱田)

海鷗 老兄御内拆

松菊生

一二四 大木喬任宛書翰

明治二年十月十日

亂筆高恕

拜啓昨日は參上仕緩々得拜話不圖長坐御妨申上奉恐入候御高論拜聽仕候上種々御馳走頂戴奉萬謝候折角可申上と奉存居候事件も多少之憂情に取紛申上殘候尙後日拜青折を以申上度奉存候于時井上新一郎事大村一條に付内密近方へ急々差越只一日半計り之事と愚考仕候處今以相歸り不申御役所を闕如仕候邊何とも奉恐縮候此段先生へ内密申上置候不惡御舍被成

(大村は大村益次郎)

置被遣候様偏に奉願候先は御斷且御禮旁奉捧呈候草々頓首九拜

十月十日夜

尙々大村一條其元因御推察之邊被爲在候は、無御腹臆偏に御示教奉願上候拜

(大は木大木喬任)

大先生御密拆

木生

一二五 中井弘藏宛書翰

明治二年十月十二日

大亂筆御推覽可被下左候而必々御投火奉願候以上

拜啓今日草臥罷居候得共段々苦念之廉も有之午時後より烏渡參内仕御様子相窺乍微力一論相盡し大久翁とも一應御議論有之候得共また至當之次第も有之候歟徹上不仕山氏も越と彌相きまり申候先生には御舊藩より之御申立も有之候由に一應御願通に被仰出候御様子乍去一度其御次第相立候得は再御苦勞無之而は相計申間敷と奉存候當府之處は大

(大久翁は大久保利通)  
(山氏は山口範藏)  
(大木は大木喬任)

木氏之任と相成申候然しながら開市一條其外外國へ之行かへりは則今肝要なる御事件に付誰歟は未存不申得候ども御都合之處得と御傳受被成置候方可然と奉存候昨夜之様子も粗想察仕候は山口氏へもいかにも氣の毒千萬に元より山口氏は□とも思ひ申間敷候得共人間之事難時に當り候は是に大に勞をかけ平易に至り候は却る他へ移し候など、申儀甚以不安耻入候至極に御座候得共此先きを辨じ候は男子之不忍ところも御座候間筆申候外と云内と云不及事ながら懸念仕候に付是丈け不得止御洩し申候に付必もあとの處は十分に御傳受御差圖被成置度奉存候勿々頓首拜

十月十二日夜

尙々山口氏へも御口頭にも御折も御座候は、よろしく御致意偏奉願候拜

(此書宛名署名を缺くも木戸孝九が中井弘藏に贈れるものなり)

一二六 福井順道宛書翰

明治二年十月十五日

彌御清福大賀此事に奉存候昨日は不存寄霜羽御惠投早速賞玩仕誠に御高意不知所謝却る恐入申候さては千萬御手数之儀に御座候得共過日粗御願申置候に付可相成事に御座候は、御周旋奉頼度則別番二通六七通兩三日に相認め候事に御座候は、加藤氏に御頼可被遣候本書は弟相認め候差出可申候得共要路之向へも一書宛差出得と微志陳謝申度合に御座候此段可然奉頼候草々頓首

十月望

尙々つまり一二通は一兩日延引仕候もよろしく如御承知一家多くは愚筆而已甚差聞申候字は細き方よろしく御座候以上

洞雲 先生御直

允

(洞雲は福井順道後ち松井順三)

一二七 横村正直宛書翰

明治二年十月十五日

木戸孝九文書卷九 (明治二年十月)

四百五十五

大亂筆御推讀可被下候且必々御火中是願候

彌御清適に引續き御盡力大賀此事に御坐候御地之光景如何東京も依舊不面白陰然浮浪に權歸し候様之勢被相顯彈正臺と歎申處先其集屯之基に御坐候必竟是も上の方之よひ顔をする所より之起り實に輕薄至極に御坐候いづれ基本一振起之策不相立ては終に如何とも難致今日之風情恰もさゞひの路店に上り已に爐火之邊に至らんと欲し鎖戸安するもの、如し浩歎之至に御坐候于時御國はとふ歎方向先一方に相向き候歎之由御互に雀躍此事に御座候大に慨歎仕居候ものも不少一機會無之は不相成事と考へ申候兵部省も此まゝにゐはいづれ瓦解に至り可申何分にも大村を速に快氣爲致大に相助け不申は不相成事と存申候せめて兵部省なりとも他日之柱に訖度力を貯へ候氣を養ひ置可申と兼大村等とも大に密に相謀り置候處實に此度之一條に大に相動き隨ふ是迄之策を摧崩せんと相謀るものも不少漸遙々にして陰然船越等を助如糸に維持いたし居申候御推察

(船越は船越衛)

(大村は大村益次郎)

(海江田は海江田信義)

(松崎澁右衛門は松崎佐敏)

(大津は大津四郎右衛門)

(十八眞は横村正直)

可被下候海江田は大姦物なり大に御用心大村之一條も彼煽動と申説有之申候昨年来之私怨に己之非は知らず却大村を怨み是までも大村をおとし候姦謀を屢相企候由に土人などよりも竊に氣を着け吳候事も有之申候高松之姦人なども相合し姦人より之賄賂をとり誤る松崎澁右衛門に於刑法官小陰けへまねき其禮を陳へ松崎三月十六日に來り大に慨歎いたし候事有之申候松崎姦人之手斃され果し其言實に可憐可慨の至に御座候于時別紙毎々乍御手数御とゞけ奉願候先は爲其草々頓首

十月十五日

尙々大津へも可然御一聲可被下候只々大村之全快を相望み相急き申候以上

十八眞樓盟兄極内密

木山人

一二八 廣澤兵助宛書翰

明治二年十月十五日

木戸孝元文書卷九 (明治二年十月)

四百五十七

(イ勢は伊勢華)

昨日は朶雲御投與拜誦仕尙別紙イ勢子之分も披見仕候高松之事さてく  
苦々敷事に御坐候三月十六日松崎澁右衛門余を木屋町に尋呉れ大に  
朝廷上と且内輪之事を慨歎仕居申候

(海江田は義方)

朝廷上事と申候は刑法官海江田等に姦人相結賄賂を遣ひ海江田誤る賄賂  
之禮を松崎に申候由如此折柄尤肝要之御役席害有之候は終に有志は骨  
を露し候外無之と申事今は在耳底可歎之至可憐之至に御坐候大村一條に  
付候は海江田其煽動と申内々説も有之申候如此事には

(大村は大村益次郎)

朝廷之御不仁に相當り實にく奉恐入候事に御坐候大村云々は拜青之  
上ならては盡不申他日可申上候會津跡式之事は實に世間議論如山一つも  
のが知藩事は些六つヶ敷可有之候間何と歎申事に一體之きまり今少々  
御見合有之候は如何如此至罪又如此寬典刑律外之御所致被仰付候に付  
は高松なと之如きは只一藩之事に自ら其輕重も有之必竟寬に狎れ恩  
に狎れ

朝威如何と奉恐入候事に御坐候尙拜青可申上候會論  
朝廷中に亦もかまなく申候由に付一應可申上と過日參上仕候處折柄御外  
出に亦其後別に嘶も不然處十三日に又段々四方之事何と歎歎と歎無余儀  
入耳申候間折角可申上候奉存候其節松崎等之事もちらと承り申候草々頓  
首拜

十月望

(俊介は伊藤博文)

尙々イ勢より民部へ之書面は直俊介へ相頼申候以上

老兄御内拆

允拜

(此書宛名を缺くも木戸孝尤が廣澤兵助に贈れるものなり)

一二九 大村益次郎宛書翰

明治二年十月十七日

亂筆高恕御火中

寒冷日々相募候處漸々御快方とは奉遙察候得共如何とまた御按事仕候中

木戸孝尤文書卷九 (明治二年十月)

四百五十九

(船越は船越衛)

頃日御直左右承り大に安堵仕候何卒御全復早々御東歸奉待候徒らに御東歸を奉待候に無御坐兵部省も自然勢如糸陰然船越などを相助け維持之處を相論し申候彼も余程困迫毎々罷越候も苦談仕候兎に角彼一人に相且々相つゝき居申候一旦彼相去り候とき百事盡瓦解然るにまた惡物等船越を妬み種々之姦計を廻らし遠く事之策を施し候趣且又政府より兵部省へ擊劍論などをもち出し言語之次第是に御想察可被下候浩歎之至に御坐候實に此際尤大事に付吳々も船越に相論し彼も只今之處に相は飽まで相任じ居申候間必御安心は可被成候何分にも迅急御快復千祈萬禱之至に奉存候先は爲其早々頓首拜

十月十七日

尙々余り上の方も因循に相殘慨之事も不少過日別紙之一書を横濱書生を以建言に及申候以上

(藏六は大村益次郎)

藏六 先 生御密拆

允

一三〇 廣澤兵助宛書翰

明治二年十月十八日

亂筆高恕自他拜青尙又緩々申上候拜

一昨日は朶雲御投與折柄外出中に終に至り歸寓仕候位に早々御答も不申上奉恐入候鳥尾之一書慎に落掌仕候山田其外よりも段々書狀差越候處御國も逐々御着手相成今日之處に相は方向も相定り漸々進歩之勢も有之候由於弟も御國之事一念に御坐候處如此嬉敷事は無御坐御互に大慶之至に御坐候何卒此上は天下之事益方向不相動萬民益得其所姦兇消滅仕

(鳥尾は鳥尾小彌太)  
(山田は山田顯義)

(御堀は御堀耕助)

(大久保は大久保利通)

皇威日を逐ふて相輝き候様奉千禱候御堀も過日來度々罷越從來之勘考今日に至り大悟覺然之件も不少趣逐々自談尙此上宇内之大勢を一見仕候は、新洗之一功も可有之必竟爲國に御坐候間任同子意外行運方之邊も周旋仕見昨日大久保へ歸り懸立寄緩々時勢も相談且御堀も此度西行いたし候

木戸孝允文書卷九 (明治二年十月)

四百六十一

に付而は魯夷之近況等も此行之序に探索仕り歸り候様との御沙汰に亦も蒙り度邊相論し大久保も同意に亦盡力仕吳候都合に御坐候間此段御合置可被遣候 老兄より御口出し有之候より大久保任し吳候亦取計らひ候方勢自然之運ひ方可然と愚考仕昨日立寄り申候事に御坐候先は爲其草々頓首拜

十月十八日

(此書は署名宛名を缺くも木戸孝允が廣澤兵助に贈れるものなり)

一三一 吉富簡一宛書翰

明治二十年十月廿六日

亂筆御推讀竹田秋月先生は鴻城子今住居に候哉是又可然御傳言可被下候

過日は御手紙御投與致拜見候彌兄始御滿客御平安大賀此事に御坐候弟も不圖奇病に相かゝり候處至當節候亦は漸々快方に傾き候間先御安心可被

(井上は井上馨)

下候是まで造物者よりも非常之寛典に預り居候事に付一手一足を廢し候位に亦不足もならされ不申候得共如兄□□非常にまた剛強に過ぎ候ものは少しは御咎有之候方公私可然造物者之意如何と存居申候于時井上氏も過日發途不日鴻城に着と相考へ申候定亦近況は一々御承知に可相成と御察し申候とふ歎此度は同行御東上に相成候事と樂み申候先は御一左右まで如此に御坐候草々頓首

十月廿六日

尙々片治阿平及小郡之老翁どもへ御序に可然御一聲御頼申候

樂水 兄御直

松 菊

(片治は片山治助阿平は阿部平左衛門(樂水は吉富簡一))

一三二 小笠原丹波宛書翰

明治二十年十一月三日

拜啓今朝は態と御光來奉萬謝候御禮且御暇旁參上可申上候處朝來少々不快に亦亂髪逢髮外勤不得仕候間失禮申上候御容赦奉願候向寒之折別亦御

木戸孝允文書卷九 (明治二十年十一月)

四百六十三

自玉第一に奉存候草々頓首拜

霜月三

尙々鐵面皮之至に御坐候得とも御沙汰にしたかひ出たらめに揮毫仕候

御一笑まで相備申候敬白

小笠原先生拜呈

木戸

小笠原は  
波)

一三三 作間正臣宛書翰

明治二年十一月七日

先達諸藩へ東北其外戦士功勞之次第

朝廷より詮儀仕候申出候様被仰置候處尙此度可成丈け速に精々詮儀いたし候る差出し候様今一應

朝廷より諸藩へ被仰出候方可然との御評議に右御沙汰書草按史官方へ御談仕候都合に失念いたし候間早々被仰合候可然御つゝり相調次第

大久保へ御渡可被下候奉頼候先は爲其取急勿々頓首拜

大久保利  
通)

十一月七日

木戸

作間契兄

一三四 土方久元宛書翰

明治二年十一月七日

大亂筆御推覽を玉わり候は、直ちに御投火奉願候拜

拜啓先以

御清榮奉大賀候過日は度々失敬申上爾來御無沙汰申上候平に御容赦奉願候さては匆卒申上候は甚如何と奉恐入候得共弟誠に困窮仕候故御舊知と奉存御すがり申上候間何卒微意御舍被下候可然條公へ御内密被仰上被遣候様奉願候其次第は余之儀に無御座頃日御用召有之とふ歎隔日にも

參仕被仰付候歟之御様子弟又候鐵面皮に參仕仕候とも決り朝廷之御用に相立候目的も無御座且權門之前に屢出入仕候事もこゝろよしと不仕心事も有之此心事容易に紙筆にも難被盡い曲は拜青可申上候得



其昨春來も大方面之相定り候事に付候は内外之處弟丈は外になり内になり様々苦心盡力仕見候心得に御座候處却る水泡に屬し聊御爲と相成候様にも不考其とて弟世間之時論におもねり獨り脩飾に安し候様には頑質一日も得隨ひ不申候只々

朝廷上を御輕薄御不慈悲と而已奉存候處全左に無之必竟弟等之微誠中々御爲に可相成事に無御座と奉存候弟東歸之御内命有之候已に七十日東歸仕候已に四十日一時之御下問も無之徹到無御據より出候事に今日之際如此御氣兼被爲在候様には決る萬民之爲にも不相成實に如弟等は溟潢之池へ御投擲被爲在候御至當に於弟も亦誠に安心仕候此度俄然と被仰出候事も其元因之有之候儀に只々戲場之如き譯に御座候同國之ものを以申出候も些不都合と奉存候間先生は條公に多年御隨從被爲成候御信儀も有之候御事に付偏に先生之御舍を以被仰上此度參仕之御沙汰御止に相成候様御盡力奉願上候誠に以進退相せまり申候條公へは參館

仕候も心事言上仕候もよろしく御座候得とも萬機之御事務を奉妨候事と奉存差控申候尤他之權門へは足か罷出候事をいとひ申候御憐察可被下候明日より横濱へ罷越候に付參上も不得仕乍略儀書中を以奉願候間吳々も御汲取被成下偏に御高配奉願上候歸京後は早々相窺可申上候草々頓首拜

霜月七日夜半

允

土方 先生内密御直拆

(土方は土方久元)

一三五 土方久元宛書翰

明治二十一年十一月九日

大亂筆御推覽被下直ちに丙丁へ御附し可被遣候奉願候

拜啓彌

御清適奉大賀候過日は匆卒に一書呈上仕候處如何御聽取被成下候哉弟今日に當り屢參

木戸孝九文書卷九 (明治二十一年十一月)

四百六十七

朝仕廟議之御席へ倍し候とも決る萬一を御補助仕候目的更に無御坐且其上狂頑之性質を枉げ前途之大艱難を察し國之進歩を急き候に付るは人之顔色をうかゝひ又は世間世事に合せ候様之事は誠に以不得手に此余とても相つとめ候事難出來只々孤劍遊天之念勃々に御座候折も有之候は條公へも言上仕度奉存居候得共強る權門に出入仕候を不欲先々時機を相窺ひ候處此節無據御沙汰被仰出候歎之邊薄々承知仕却る廟堂諸公へ御苦慮を懸け候は奉恐入殊に又弟心事におゐても度々申上候通進仕之念聊無之只乍陰

朝廷上御輕薄無之御欺詐無之萬民方向を不惑彌信を天下に被爲布候様奉祈候而已に御坐候老兄には多年條公御左右にも被爲居候御事に付御絶り申上候間心事御汲量を玉わり可然御防禦被成下候様内密奉願候曾る御示しにしたがひ暴に揮筆仕候一詩中邦家前路不容易三千有萬奈蒼生此詩之一篇も不可盡心事に御坐候御降憐奉願候乍再應爲其奉呈候吳々も可然

奉願候草々頓首九拜

霜月九日夜半横濱旅寓之燈下に認

土方 老 臺御密拆

木戸 鏡 面

(土方は土方久元)

一三六 三條實美宛書翰

明治二十一年十一月九日

謹呈先以

御清雅被爲入奉恐賀候さて官祿一條も漸御決定に被爲至候處諸省中隨分議論も可有之乍去此上は御施行之外致し方無御座何卒昨日大隈より差出候邊に速に御決定可然と奉存上候尤廣澤始へ今一應得と御示し早々御

(大隈重信)

(廣澤兵助)

一定奉祈候且又今般政府へ諸省之諸務御束相成候に付るは御體裁上より議論出來仕候ときは其條理相立かたきつれ何と歎御改め無之るは此末必諸省之卿大少輔は御斷申出候都合に至り可申は必然と奉存候御賞典論も過日御示被爲在候通之御次第に下より願出候とて容易に御許容被爲

木戸孝元文書卷九（明治二十一年十一月）

四百六十九

在候も根來

御主意難相立此後御賞典之御規定被爲改候と申事に御座候へは其御次第も相立候へ共願により候も與奪輕易之御所致は如何哉と奉存候尙他日大隈にも被召呼主意等も御尋之上御一定之儀は被爲立置區々之御主意に不相成様被爲在度奉存候先は右奉言上置申度奉捧呈候誠恐々々頓首九拜

霜月九日夜

二白廣澤發途前御體裁其外御半途之件々は被爲定候方可然と奉存上候  
敬白

三條公閣下密呈

(三條は三條實美)

孝

允  
敬白

一三七 伊藤博文宛書翰

明治二十一年十一月十三日

彌御清榮大賀候嚙々御繁多と御察申候自然御用御座候は、緩々御出港可被成候弟も最早滯港相成がたく候間兩三日中引取申候御待は不申候爲其

草々頓首

霜月十三日

(大村は大村益次郎)

尙々大村没去之到來有之力も落勢無御座候痛惜無限御降察可被下候以上

(芳梅は伊藤博文)

芳梅 兄御直

鐵面生

一三八 大久保利通宛書翰

明治二十一年十一月十三日

拜啓寒氣逐日相募候處先以御清榮に御盡誠奉大賀候さては別紙井上聞多より差出申候に付則相呈候

(木場は木場傳内)

朝議元より御疎不被爲在御事に御坐候得共大坂府之處大參事一人は是非本體に相立不申は御不都合に付木場氏御昇任に相成候得は別可然御事に付此段建言仕吳候様申越候間其儘申上候尙廣澤へも一書申遣し置候間可然御詮議奉祈候先は爲其奉呈候草々頓首九拜

木戸孝九文書卷九 (明治二十一年十一月)

四百七十一

霜月十三日

(山田顯義  
船越衛河田  
景興)  
(大村は太  
村益次郎)

(東久は東  
久世通親)

(甲東は大  
久保利通)

(平原は平  
原平右衛  
門)

尙々昨夜山田船越河田ともより書翰到來披見仕見候得は終に過る五日  
之夜大村も絶命に及び候由彼前途之御爲を憂へ候心事聊も不相貫於私  
情も慙然に堪へ不申候○蝦夷之處も實に朝廷不容易御苦慮と奉存候魯  
夷より逐々軍艦を備へ候様子彼交際之爲と申候も中々油断は相成不  
申歟と奉存候元より御疎不被爲在御事御定算上之御處致と奉存候得共  
萬々一も先きを欲却る前を失し候様之義有之候は不相濟と奉存候別  
紙東久公より到來候に付只々老台之御内覽までに相備へ申候御一覽後  
御返與奉願候此儘他へ御示しは御用捨奉願候亂筆草々拜

甲 東 老 臺御密拆

干 介 生

一三九 名和緩宛書翰

明治二年十一月廿五日

今朝は御答書御示拜見仕候于時平原等も今晚より船宿に至り蝦夷行いた

し候由弟も閑隙なり今一□戰場御出合有之候は如何別に御用無御座候  
は、御光來可被下候尤世事は毫も關係不致言ほど聞ほど悪く相成申候一  
日凌きの出たらめが一番よろしき事と被思申候草々頓首

廿五日

允

名 和 兄御内密

(名和は名  
和緩)

一四〇 吉富簡一宛書翰

明治二年十一月廿七日

亂筆御推讀

昨日は御光來雨中別る御苦勞と存候さては其節御嘶申置候件々得と徹底  
致し候様御論し可被下候必竟今日之騷擾に至り候も御一新已來  
朝廷上と長州とは只形ち之上而已御一樣に氣脈は大隔絶いたし隨る御  
國內元より一部署としても御一新之大御主意を辨へ候ものは毫も無之人  
に勝手に惑わせ勝手に思わせし次第に縋一二年上之處より終に人心之

方向如此相亂れ其元因を推考候ときは則如此に又至らざるを得ず今日形  
 ち上にあらわれ候處を以驚き候は抑末之末と存申候如薩州も少々内外之  
 違ひ有之候歟にも承り及び候處能々此度も承り見候處始終是非々々  
 朝廷之御主意は繼述仕度との一念に在國亦も只々盡し候處は  
 朝廷との氣脈相隔たらざる様にとの事までに御坐候由申候國內之事之益  
 相舉り候も偶然に無之候元々  
 御一新已後之處は薩長如きは何事も直に  
 朝廷に相添る進歩有之候事は不待言葉譯に御坐候へども實に薩と違ひ長  
 州は自然後にとゞまり候形ち有之色有之弟一人に在無之天下憂前途候も  
 のは漫に相論し居候事に而已○昨夏斷然弟も  
 朝堂に立ち候念を相絶ち申候元より病氣も日々増長いたし候に付只々退  
 養を而已存込時勢之事も明らめ申候此已後之處も眞に  
 朝廷を助け

皇國を起し候之氣貫通仕居候へは御國之處も左ほどいそがずとも前途  
 之處不足憂如是迄内外反體いたし候ときは不遠又混雜可仕然る上は只御  
 國之混雜而已に亦も無之終に  
 皇國御維持も如何と奉存候得と元因を御推考諸子も偏見におちいらす内  
 外相救へば必前途は興起仕候處之道理を御論定可被下候さて、世の中  
 と申ものは悪しければ思ふよふに不至またよければ思ふよふに不至終に  
 々々人之口に随わねばならぬと申事も余りと存候無止事候へは弟は只々  
 木石と相成候外いたし方無之御憐察可被下候草々頓首

十一月廿七日期

樂水 兄内密

(樂水は吉  
當簡一)

一四一 廣澤兵助宛書翰

明治二年十二月二日

先夜は舉る參上倍御盛宴難有奉謝候歸國論も弟歸り候とて中々易は有之

木戸孝元文書卷九 (明治二年十二月)

四百七十五

(老君上は毛利敬親をいへるなり)

間敷候得ども切に其促も有之且御國之事故毫頭ほどにても微力之及び候事に御坐候得は相盡度ちらと承り候得は  
老君上へも何歟御用も有之候歟之由佐候得ば其命を表向は蒙り歸り候へは無此上岩卿之御内意鳥渡相窺申候可然様奉願候且又支朝二國行之事は老兄之命に従ひ御内命爰元にて相蒙り候る歸り候都合に相決し可申候凡る可然是又奉願候參上可仕と奉存候處最早御參  
朝前に御妨と奉存差控申候草々頓首拜

極月二日

鐵面

(障岳は廣澤兵助)

障岳 老兄御内拆

一四二 榎村正直宛書翰

明治二年十二月三日

亂筆高恕

(海は海江田信義)

海云々爲大村にも甚遺恨に御坐候不得止薩へも條岩へも公然逐々之

(大郎は大村益次郎)

過日は朶雲御投與拜見仕候引つゝき不一形御盡誠大賀此事に御坐候東京次第を擧げ相論し申候尤薩へは條岩ほとには暴露被致かね申候も都合無事乍去此儘にゐは天下じんきよは致す間敷歟と甚苦憂仕候實に々々可痛歎は大郎翁之不幸兵部省も此往如何と致煩念候今日之姿に眞に盡力仕候ものは又如大郎患害を受け候歟も難計必竟政府に人を殺し候も同様にも如大郎は於私情遺憾千萬難默止候間血泣建言仕候海印等も實に迅速放逐位は無之ゐは不相濟事と考へ申候神代之一條も甚殘念千萬之次第に天下億萬之眼に對し被所嚴刑候得は益

朝廷之御威光も相立御國之旨趣も貫通いたし重疊之事に御座候處只々目前之了簡而已に一事を誤り申候始終ケ様に相成候は天下平均之政被行終に宇内に獨出したし候處之御基本は六つケ敷と杞憂之至に御座候  
一 弟も鳥渡御國より歸り吳候との事に御願書も出候處  
朝廷より之御用に被差向候との事に御書面は不及御沙汰付は近々

より鳥渡歸國いたし候心得に御坐候何歟御高按も候は、山口之方迄御申越可被下候于時今一事御願仕度御多務之央何とも恐入候得は内實來春は支那北京朝鮮へ罷越候蒙御内命居申候(申斷か)

一 紅木印願實に御面倒之次第と奉恐入候十三兩一步御送り申候今少々不足に可相成と奉存候書付紛失仕委敷不相分又は木梨氏にも取替置吳候哉一向不相知候間先別包丈け差上げ置申候間是又後便に御示し可被下奉願候

先は御頼旁得御意申候毎々御多務央御面倒之事而已申上何とも恐入申候其中時下御自玉第一と奉存候草々頓首

極月三日

鏡 面

(十八眞は  
横村正直)

十八 眞 兄御内拆

一四三 大木喬任宛書翰

明治二年十二月十三日

亂筆高恕  
昨日は御光來被成下候處折柄外出仕甚失敬申上候十六日發途之積に於十五日一日は閑暇に仕置申候處今朝報知有之十六日に蒸氣揚碇之由に於十五日朝には是非出立不仕るは間に合不申依る誠に残念千萬に奉存候得共寸暇無御座十五日に一夕可相窺と奉存候處右之次第に付如何とも難致明日中に鳥渡登門可申上と奉存候可相成は晝迄に參上仕候心得に御座候先は爲其草々頓首九拜

極月十三日

木 戸

(大木は大  
木喬任)

大木 先 生御内拆

一四四 大久保利通宛書翰

明治二年十二月十四日

朶雲奉拜誦候先以 御清適奉大賀候さては態々便船之義御知示御高意之程奉畏候弟も其後承り見候處十九日米飛脚船ヲルユニヤ横濱揚碇之様子

木戸孝元文書卷九 (明治二年十二月)

四百七十九

に其まては別に便船無之様被窺申候明日之出足は延引仕如最前十六七  
之積りに仕候先は御答まで草々頓首奉復

極月十四日

允

(甲東は大久保利通)

甲東 盟 台拜復

一四五 岡部利輔宛書翰 明治二年十二月廿七日

爾後彌御壯榮と奉存候北堂君始皆様御堅固に御座可被成奉大賀候さては  
貴兄御事工部省におゐて御用有之候由に付何卒早々御出京可然工部省は  
山尾おもに盡力仕候事に付御出京之上は直に山尾を御尋可然と奉存候山  
尾より弟へ申聞け置候事も御坐候間速に其御運有之度奉存候爲其不取敢  
早々頓首

(山尾は山尾庸三)

十二月廿七日

尙々御満家様へ可然御致意奉願候以上

(甚之助は岡部甚之助にて岡部利輔)

甚之助様御直

準一郎



追加

○ 山縣有朋宛書翰

明治元年十月七日

只今四字半頃にも有之候歟一番の合鼓相鳴今日供奉當番に付不取敢支度  
取かゝり候處不圖も朶雲落掌夢中のこゝ地直に拜披仕候處態と當道に御  
出浮之由實に今春來之事不堪想像候今日右之都合にて供奉故少しは隙取  
可申歟精々都合可致と存候間何分にも弟旅寓にて御待可被下候何も拜青  
上と喜憂之件々相包み置今宵を相期し相樂み匆匆擱筆頓首拜復亂筆高恕

十月七日

干 令

素狂 盟 兄内拜復

(素狂は山縣有朋なり)

(當道は東海道なり)

昭和五年四月二十日印刷  
昭和五年四月廿五日發行

木戸孝允文書第三

非賣品

木戸公傳記編纂所藏版

木戸公傳記編纂所代表者

編纂者 妻 木 忠 太

東京市四谷區新堀江町三番地

日本史籍協會代表者

發行兼印刷者 早 川 良 吉

不許  
複製

64  
254

終